福岡市埋蔵文化財調査報告書　第161集

唐原遺跡

——墳墓編——

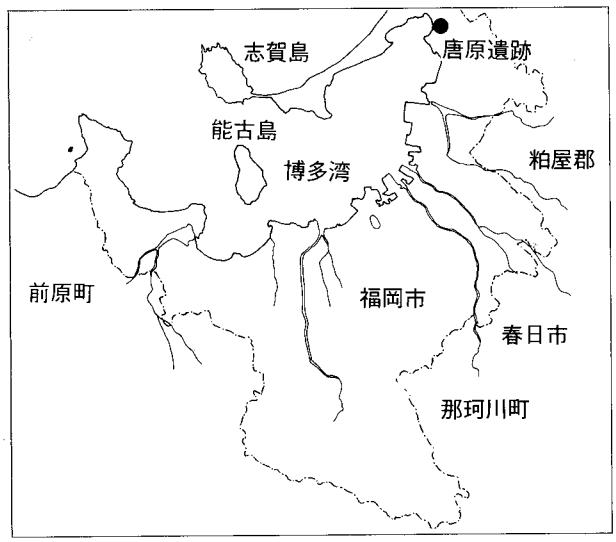
1987

福岡市教育委員会

とうのばるいせき

唐原遺跡

――墳墓編――



1987

福岡市教育委員会

題字は、福岡市教育委員会文化部長　河野清一氏による

ST－01全景

ST－01　周溝内遺物出土状況

序

いにしえの昔から、大陸文化の窓口として博多湾は常に清新な息吹きを送りつづけてきました。この博多湾の東部には和白浜・香椎浜の砂丘が拡がっています。

今回調査した唐原遺跡は、博多湾に面したこの砂丘上に位置し、眼前に開けた干潟には数千羽の鴨・都鳥などが越冬し、豊かな自然に包まれたところです。

発掘調査の結果、弥生時代後期から古墳時代にかけて綿々と営まれた一大集落遺跡・墳墓群が検出され、海にむかって躍動する古代人の姿を容易に想い浮べることができます。また、砂丘上に営まれた住居や墳墓群は古代の集落や社会構造を究明する上で貴重な資料になるものと考えます。

本書は、唐原遺跡で検出された膨大な資料のうちの墳墓に関するものです。収録された資料が、市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究の分野においても役立つことを願うものであります。

なお、調査にあたって、ご指導・ご助言をいただいた諸先生をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。記して深い感謝の意を表します。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　　佐藤　善郎

れいげん

□　本書は福岡市教育委員会が、1984年10月～1985年12月に実施した唐原市営住宅の建替えに伴って発掘調査した「唐原遺跡」の発掘調査報告書―墳墓編―である。竪穴住居址、炉址等の―集落編―については昭和62年度に報告予定である。

□　本書に使用した方向はすべて磁北方向であり、真北からの偏差は西偏6°21′である。

□　本書に掲載した遺構の実測と写真撮影は小林・小畑が行ない、実測については参加学生諸君の協力を得た。

□　本書に掲載した遺物の整理実測は小林・小原が行ない、製図と写真撮影は小林が行なった。

□　遺構は呼称を記号化し、箱式石棺墓をSX、古墳をST、竪穴住居址をSC、土壙をSKとしたが、円形周溝墓、方形周溝遺構、火葬墓についてはそのまま使用した。

□　本書の執筆・編集は小林が行なった。

遺跡調査番号：　8401		遺跡略号：　ＴＮＨ
調査地籍：　東区唐原二丁目		分布地図番号：　029－Ａ－1
工事面積：20,300㎡	調査対象面積：20,300㎡	調査実施面積：19,000㎡
調査期間：　1984年10月24日～1985年12月30日		

本　文　目　次

序

Ⅰ　はじめに……1

1．発掘調査にいたるまで……1

2．発掘調査の組織……1

Ⅱ　立地と歴史的環境……3

1．立地と歴史的環境……3

2．立地と地質……8

Ⅲ　調査の記録……10

1．調査の概要……10

2．調査の経過……12

3．調査の記録……13

(1)　箱式石棺墓……13

(2)　円形周溝墓……19

(3)　方形周溝遺構……21

(4)　古　墳……22

(5)　火葬墓……29

Ⅳ　おわりに……30

1．箱式石棺基について……30

2．古墳について……31

挿　図　目　次

Fig.　1　周辺遺跡分布図（1/25,000）……2
Fig.　2　遺跡周辺地形図（明治３年　1/25,000）……4
Fig.　3　唐原遺跡位置図（1/10,000）……5
Fig.　4　唐原遺跡現況図（1/3,000）……6
Fig.　5　唐原遺跡地質柱状図……8
Fig.　6　唐原遺跡地質パネルダイヤグラフ……9
Fig.　7　SX－01実測図（1/30）……14
Fig.　8　SX－02～04実測図（1/30）……15
Fig.　9　SX－05～07実測図（1/30）……17
Fig.　10　SX－08・09実測図（1/30）……18
Fig.　11　円形周溝墓実測図（1/100）……19
Fig.　12　円形周溝墓主体部実測図（1/40）……20
Fig.　13　方形周溝遺構実測図（1/100）……21
Fig.　14　ST－01実測図（1/100）……折り込み
Fig.　15　ST－01周溝内遺物出土状況……23
Fig.　16　ST－01周溝出土土器実測図（1/4）……23
Fig.　17　ST－02実測図（1/100）……折り込み
Fig.　18　ST－02墳丘出土土器実測図（1/4）……25
Fig.　19　ST－02周溝出土土器実測図１（1/4）……26
Fig.　20　ST－02周溝出土土器実測図２（1/4）……27
Fig.　21　ST－02出土鉄器実測図（1/2）……28
Fig.　22　火葬墓実測図（1/20）……29
付　図　唐原遺跡全体図（1/300）

図　版　目　次

巻頭図版　ST－01全景・ST－01周溝内遺物出土状況
PL　1　遺跡周辺航空写真
PL　2　調査区全景（東上空より）　調査区全景（南上空より）
PL　3　SX－01全景、SX—01全景（蓋石除去後）、SX－01全景（蓋石除去後）
PL　4　SX－03全景、SX－04全景、SX－05・06全景
PL　5　SX－07全景、SX－08全景、SX－09全景
PL　6　円形周溝墓全景、円形周溝墓近景、主体部全景
PL　7　ST－01全景、ST－01近景
PL　8　ST－01周溝内遺物出土状況、ST－01葺石細部、ST－01葺石細部
PL　9　ST－02全景、ST－02近景
PL　10　ST－02周溝内遺物出土状況、ST－02鉄鎌出土状況、火葬墓全景
PL　11　ST－01・02出土遺物
PL　12　ST－02出土鉄器

Ⅰ はじめに

1．発掘調査にいたるまで

昭和30年代、日本経済のめざましい復興は都市部への急速な人口増加を招き、わが福岡市も例外ではなかった。昭和33年、福岡市はその要望にこたえて東区唐原に市営住宅を建築した。

それから20余年の歳月を経た昭和56年、福岡市建築局の第４期５ヶ年計画が作定され、この中で昭和61年度事業として老朽化した市営住宅唐原団地の建替え工事が計画されていた。しかし、昭和58年にこの計画を２ヶ年繰り上げて、昭和59年度事業として実施することが決定され、昭和59年７月に至って、当該地における埋蔵文化財の事前調査依頼が文化課にあった。

市営住宅唐原団地は、博多湾北奥の和白浜から香椎浜と連なる砂丘上にあり、福岡市文化財分布図「東部Ⅱ、29・30」に唐原遺跡群として周知されている。また、分布調査において多量の弥生式土器・古式土師器が採集されており、弥生時代から古墳時代に亘る一大砂丘遺跡の存在が予想された。このため昭和59年９月、既存住宅の解体を待って20,300㎡の対象地に８本、のべ270ｍのトレンチを設定して試掘調査を実施した。その結果、弥生時代後期から古墳時代初めの竪穴住居址や土壙等が対象地全域に拡がる大集落遺跡であることが確認され、長期間におよぶ発掘調査が必要となった。これをもとに文化課は建築局住宅整備課と協議を重ねたが、昭和59年度内着工は動かし難く、内部調整の結果昭和59年10月24日より発掘調査を開始した。

発掘調査は建設工事の工程に沿う形ですすめられたが、集落規模が当初予想をはるかに越え、かつ200基以上の炉址、箱式石棺墓群、古墳等が相次いで発見され、調査期間の延長止むなきに至ったが、住宅整備課の方々のご理解とご協力を得て昭和60年12月30日に無事調査を終えた。

2．発掘調査の組織

調査委託　福岡市建築局　住宅整備課

調査主体　福岡市教育委員会　教育長　西津茂美（前任）　佐藤善郎（現任）

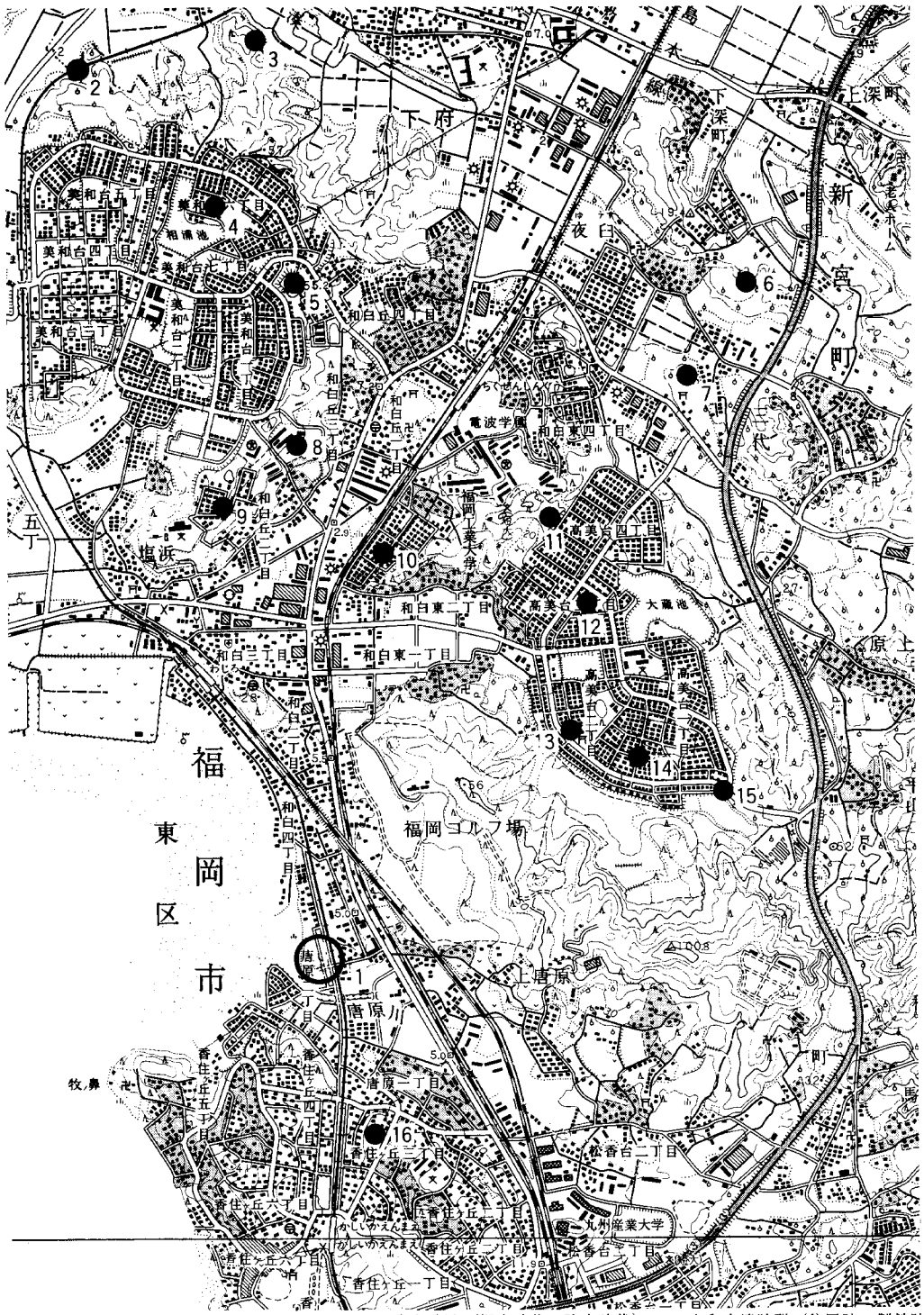
調査総括　福岡市教育委員会文化部文化課　埋蔵文化財第１係（現埋蔵文化財課第１係）
課　長　生田征生（前任）　柳田純孝（埋蔵文化財課長）

調査庶務　埋蔵文化財課第１係　折尾　学（係長）　松延好文

調査担当　埋蔵文化財課第１係　小林義彦、小畑弘己・山崎龍雄、田中寿夫（試掘調査）

参加学生　小原　哲（九州大学大学院）、山村信栄（慶応大学）、前田達男・和気いづみ（別府大学）、末次奈穂子（奈良大学）

なお、発掘調査にあたっては、岡崎　敬・横山浩一・西谷　正（九州大学）、近藤義郎（岡山大学）、小田富士雄（北九州市考古博物館）、甲元真之（熊本大学）の諸先生方には数々の貴重なご指導・ご助言を受けた。記して謝意を表したい。



1．唐原遺跡
2．永浦遺跡
3．下の府遺跡（縄文時代）
4．下和白遺跡群（旧石器時代・弥生時代）
5．飛山古墳群
6．立花貝塚（古墳時代）
7．夜臼遺跡（縄文時代・弥生時代）
8．塚原古墳群山の下支群
9．塚原遺跡群
10．中和白古墳
11．上和白古墳
12．猿の塚古墳群
13．上和白遺跡群（住居跡・製鉄跡）
14．高見古墳群
15．高見窯跡
16．香住ヶ丘古墳

Fig. 1　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅱ　立地と歴史的環境

1．立地と歴史的環境

唐原（とうのばる）遺跡は、福岡平野の北部、博多湾の最奥部にあたる福岡市東区唐原二丁目地内に所在し、福岡市文化財分布地図「東部Ⅱ．29・30」で周知化された唐原遺跡群内に位置する。

博多湾の最奥部は、玄界灘の西流海流と博多湾の左転回流の土砂運搬作用によって作られた海岸砂丘、いわゆる海の中道が10km沖の志賀島までつづき自然の大防波堤として博多湾を守っている。この海の中道の基部にあたる奈多・和白浜からは、博多湾の左転回流によって作られた海岸砂丘が香椎浜・箱崎浜へと南へつづく。唐原遺跡は、和白浜から南へ500mの海岸砂丘上に立地するが、立花山に源を発する唐原川が西流し、砂丘は一旦途絶える。遺跡の西側前面には、この唐原川の土砂運搬作用によって作られた干潟が拡がり、南にのびる香住ヶ丘丘陵との間には唐原川の氾濫による低湿地が拡がっていたであろう。

また、遺跡の背後には、三郡山地の支脈に属する犬鳴山・立花山がつづき、立花山からのびた低丘陵は東区三苫で玄界灘とぶつかり、粕屋平野を表粕屋と裏粕屋に二分する。標高367mの立花山からは北・南・西へと、新生代第三紀層を基盤とする低丘陵が幾筋も派生し、この舌状にのびた低丘陵の頂部から斜面には飛山古墳群（註1）、塚原古墳群（註2）等の群集墳が立地する。

唐原遺跡の所在する地域は、福岡市東区大字唐原（とうのばる）字大新開（だいしんかい）にあたり、昭和30年、福岡市に編入されるまでは粕屋郡香椎町に属していた。市営唐原団地の建設される昭和33年以前は海岸砂丘が拡がり、弥生時代以来の姿をとどめていたところである。この唐原村は、古来裏粕屋郡に属し、『筑前國續風土記』に「村中に唐人塚と言あり。よって村の名起れりと里傳にあり。」と記されている。また、『筑前國續風土記拾遺』には「上村下村琵琶橋。初は下村と同村也。下村の辺に塚二有。地名を塚の元と云。其辺に塔ノ元といふも有。是村名の起る所なるべし。（中略）地蔵堂高藤近辺に大墓有。里民は地主といえり。」とあり、いずれも村中に塚（古墳）があり、その塚に由来して村名としている。上村・下村は唐原川中流域、琵琶橋は香住ヶ丘団地にあたり、現在報告されている古墳は三角縁神獣鏡を出土した香住ヶ丘古墳だけであるが、元来、立花山麓や低丘陵上にはいくつかの古墳が点在していたものであろう。ここに云う唐原村は立花山南山裾に拡がる地域で、遺跡の所在する海岸砂丘は、村はずれの波打ち際にあたり、砂丘上には、古墳が連なり、あながち村名の起りと無縁でなかったかも知れない。

唐原遺跡周辺での発掘調査は少なく、昭和45年の和白遺跡群、昭和54年の塚原古墳群、海の中道遺跡、昭和59年の梅ヶ崎遺跡の調査に次ぐものである。ここでこれらの調査成果をふまえて、唐原遺跡周辺の歴史的環境について概観してみたい。

この地域に、人間がはじめて足跡を印すのは旧石器時代後期である。和白遺跡では、ナイフ形文化期にみられる三稜尖頭器が出土しており、本遺跡においても細石刃が出土している。雁

（註1）「福岡市和白遺跡群発掘調査報告書」　1971　福岡市埋蔵文化財調査報告書第18集
（註2）「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表（総集編）」　1971　福岡市埋蔵文化財調査報告書第12集
（註3）「佐谷・脇田山・古墳調査報告」　1974　福岡県教育委員会

Fig. 2　唐原遺跡周辺地形図（明治33年，1/25,000）

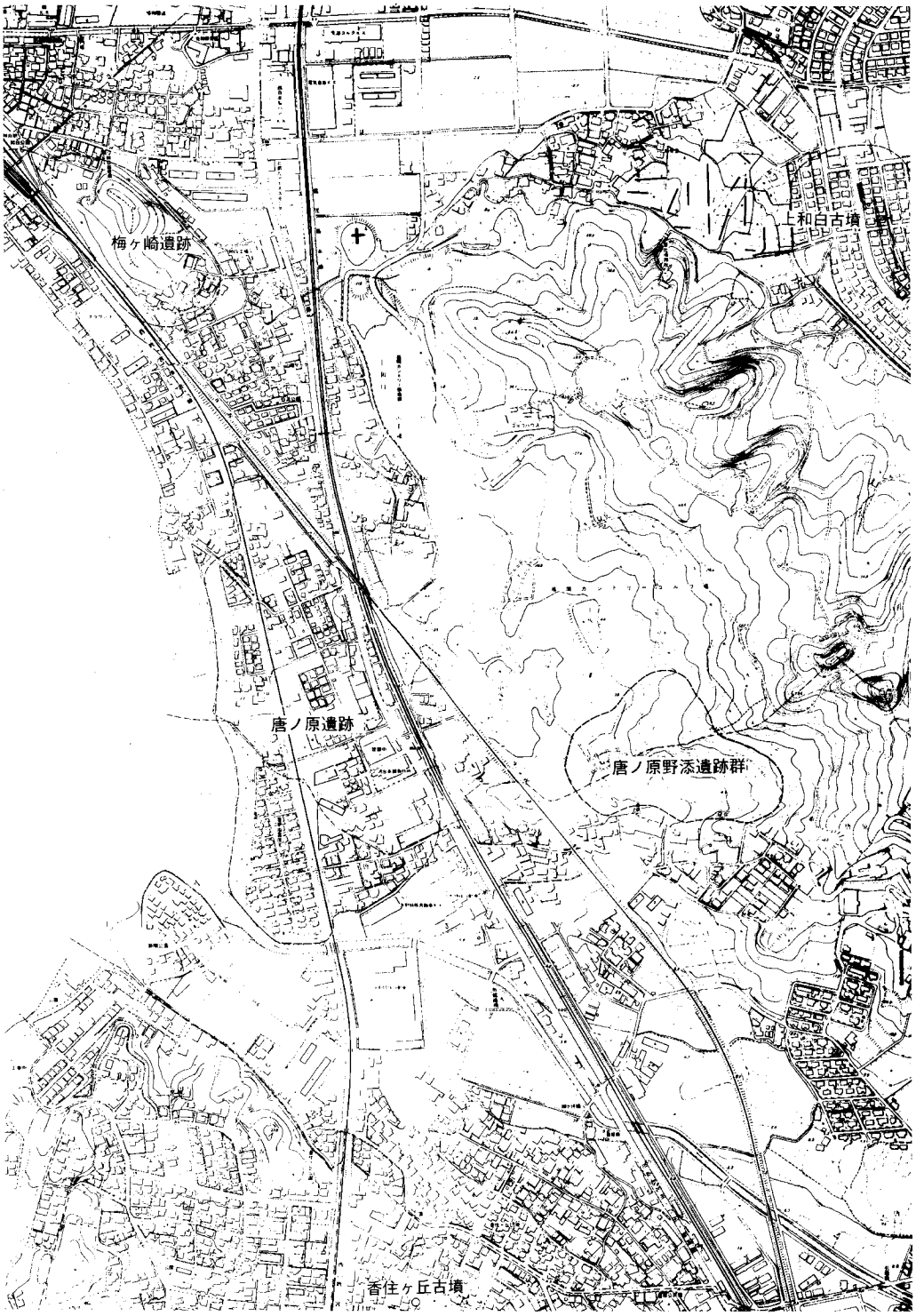


Fig. 3　唐原遺跡位置図（1/10,000）

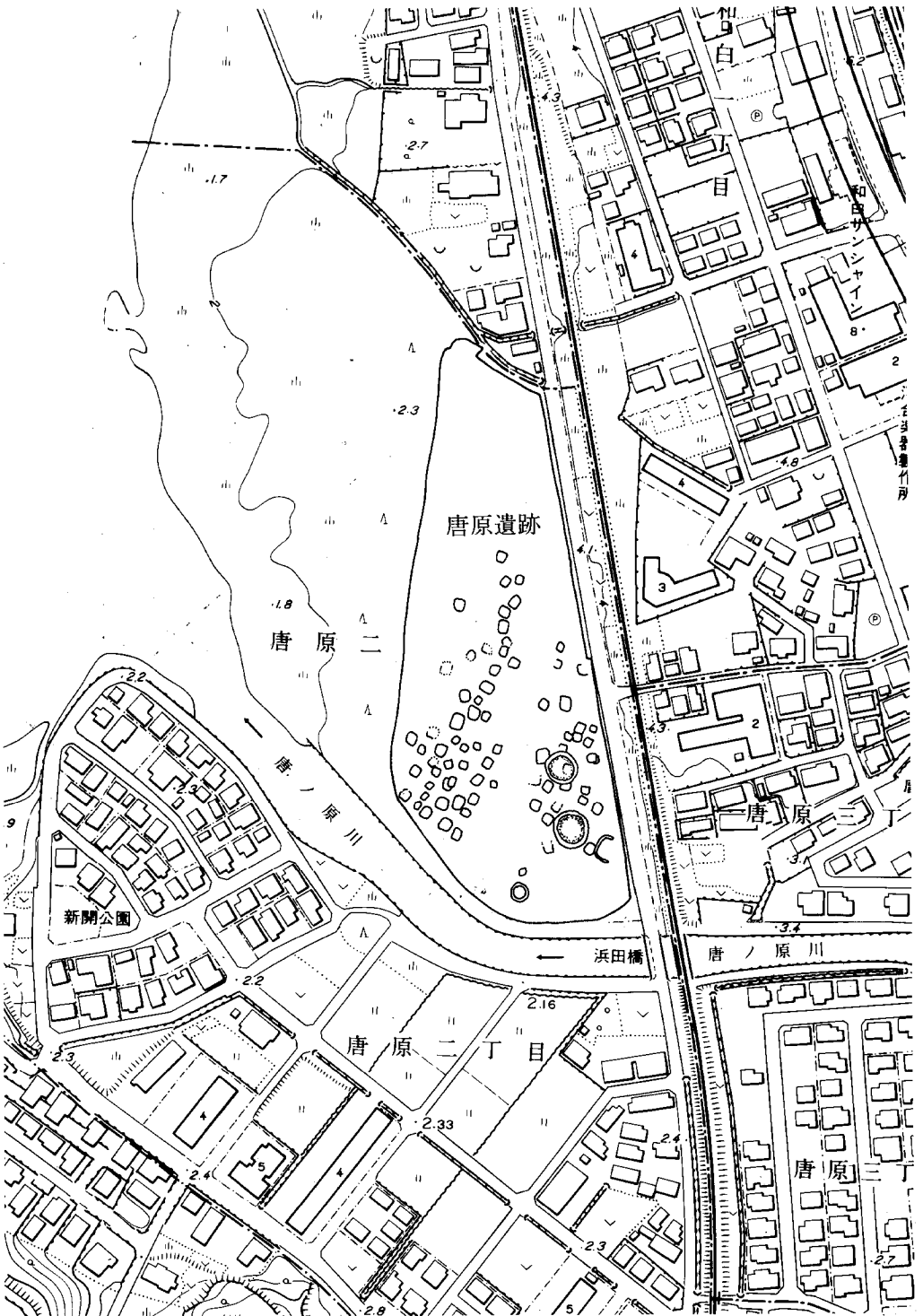


Fig. 4　唐原遺跡周辺現況図（1/3,000）

ノ巣砂丘遺跡や粕屋郡古賀町佐谷古墳[註3]からもナイフ石器が出土している。また、同町鹿部山遺跡[註4]からは細石刃核が出土している。

縄文時代にはいると後期から晩期に遺跡が散見される。志賀海神社口遺跡では後・晩期の土器が、古賀町水上遺跡・新宮町下ノ府遺跡では後期の土器が検出されている。上和白・下和白遺跡では縄文時代と思われる石匙が出土している。晩期末になると、夜臼式土器の型式認定遺跡として著名な新宮町夜臼遺跡[註5]や立花貝塚があるが、総じてこの地域における旧石器時代から縄文時代の遺跡はきわめて稀薄である。

弥生時代になると遺跡はいくらかの拡がりを示す。下和白遺跡では中期から終末期の、古賀町鹿部山遺跡では前期から後期のまとまった遺物が出土している。水稲耕作技術の導入によって肥沃な可耕地を背景に飛躍的に発展を遂げる福岡平野に比べ、海岸線に丘陵がせりだし後背平野のないこの地域は発展性に欠ける。この中にあって、弥生時代後期から古墳時代前期の漁撈的性格を有する一大集落址を検出した本遺跡の成果は注目に値する。

古墳時代になると、立花山から西に派生した幾筋もの丘陵上に古墳が現われる。まず4世紀後半代に本遺跡南の丘陵に香住ヶ丘古墳が出現する。舶載の三角縁二神二獣鏡を出土して著名なこの古墳は、海に臨んだこの狭小な平野を包括する首長クラスの墳墓であろう。この他に三角縁神獣鏡を副葬する古墳としては東区唯一の前方後円墳である名島古墳[註6]が挙げられる。5世紀代になると、和白丘陵に竪穴式石室や竪穴系横口式石室をもつ飛山1・2号墳がある。古賀町鹿部山遺跡群浦口4号墳も竪穴系横口式石室を内部主体としている。本遺跡の円墳は石室構造は明確ではないが、これに近い時期にあたり、この両者を比較するとその立地のあり方が生産基盤の相違に由来するものか否かは明確でないが非常に興味深い。6世紀以降になると横穴式石室を内部主体とする群集墳が丘陵頂部や斜面に出現する。三苫経塚古墳・飛山古墳群・塚原古墳群・中和白古墳・宮の前古墳群・高見古墳群・猿の塚古墳が列挙されるが、いずれも1基か3～6基で一群をなし、福岡・早良平野の群集墳と様相を異にする。後背地に可耕地をもたない生産基盤の脆弱さ故によるものであろうか。一方、玄界灘に面した海の中道遺跡では古墳時代後期の製塩土器が確認され、海岸遺跡の優位性を示す生産活動が行われていた。

古代から中世にかけては、和白遺跡で奈良時代の製鉄遺構が確認されている。奈多浜・和白浜では鉱量は少ないながらも近年まで海砂鉄の採集が行われていた事実がある。製塩土器と共にこの地域の生産活動を解明する上で貴重であり、今後の資料の増加を待ちたい。一方、博多ほどではないが、和白遺跡等では中国陶磁器も出土している。中世の一時期に貿易港が那津から今津に移った時期があり、博多湾の奥に位置する本遺跡周辺の入江にも宋船が出入りしたのかもしれない。唐原村の由来とされる「唐人塚あり」の一節を思い浮べると興味深い。中世末になると後背の立花山城を舞台に大内・大友・島津・毛利氏等の戦国大名が覇権を競い合うことになる。

(註4)　「鹿部山遺跡」　19　　九州大学考古学研究室編
(註5)　「日本農耕文化の生成」　1972　日本考古学協会編
(註6)　1986年調査　池崎譲二氏御教示による

2．地形と地質

唐原遺跡は、福岡市東部に所在する香椎宮より北方約2㎞の距離に位置し、玄界灘にむかって湾口を北に開く博多湾のもっとも奥まった東北岸沿いにある。

地形的には玄界灘の西流海流と博多湾の左転回流によって作られた、いわゆる「海の中道」と云われる砂洲が新宮浜から志賀島にむかって長く西へのび、この砂洲のつけ根にあたる奈多・和白浜からは、さらに南へとのびる砂丘が香椎浜・箱崎浜へとつづいている。この砂丘地帯に唐原遺跡はあり、その前面（西側）には唐原川の土砂運搬作用によって作られた干潟が拡がり、渡り鳥の格好の越冬地となっている。

また、唐原遺跡のすぐ後背には、山城の築かれた標高367ｍの立花山があり、山塊は、さらに東へのびて粕屋平野を裏粕屋と表粕屋とに二分している。また、この立花山からは標高40～100ｍの丘陵が幾筋も派生してのびている。遺跡のすぐ東にはこの立花山から派生した和白丘

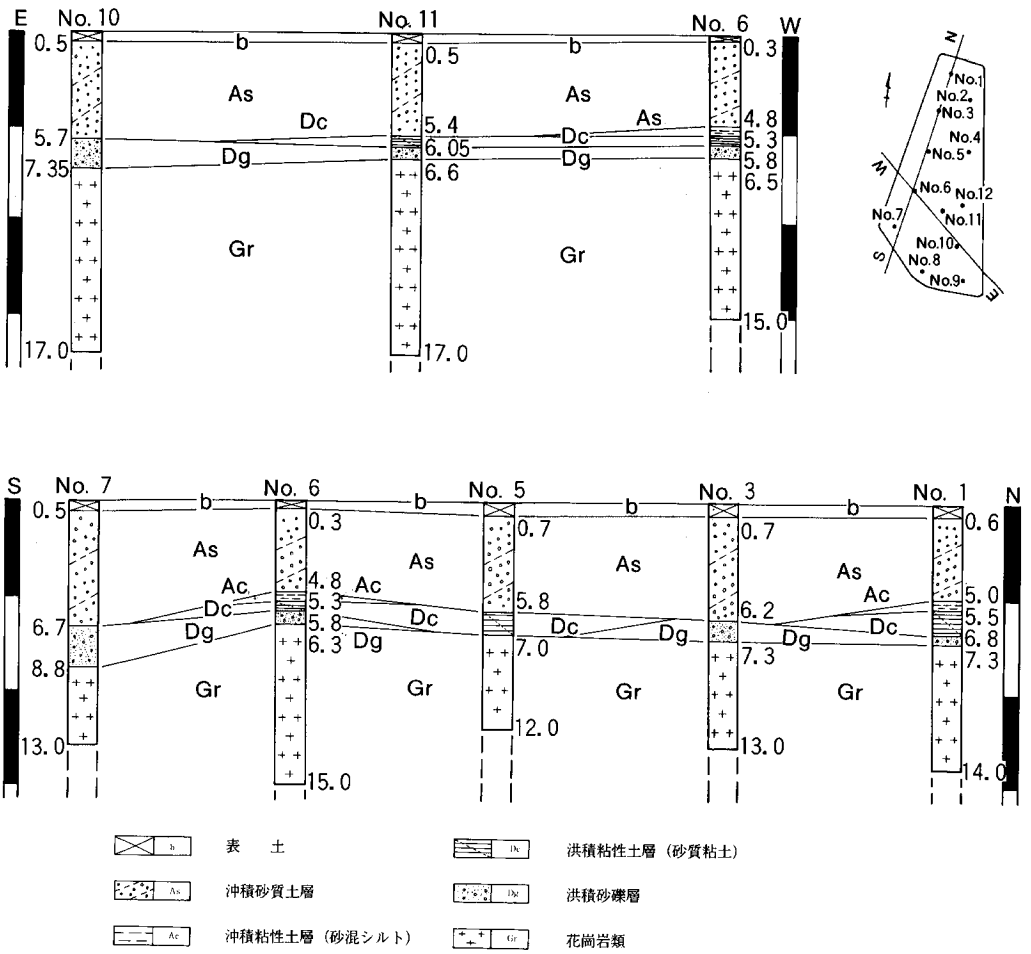
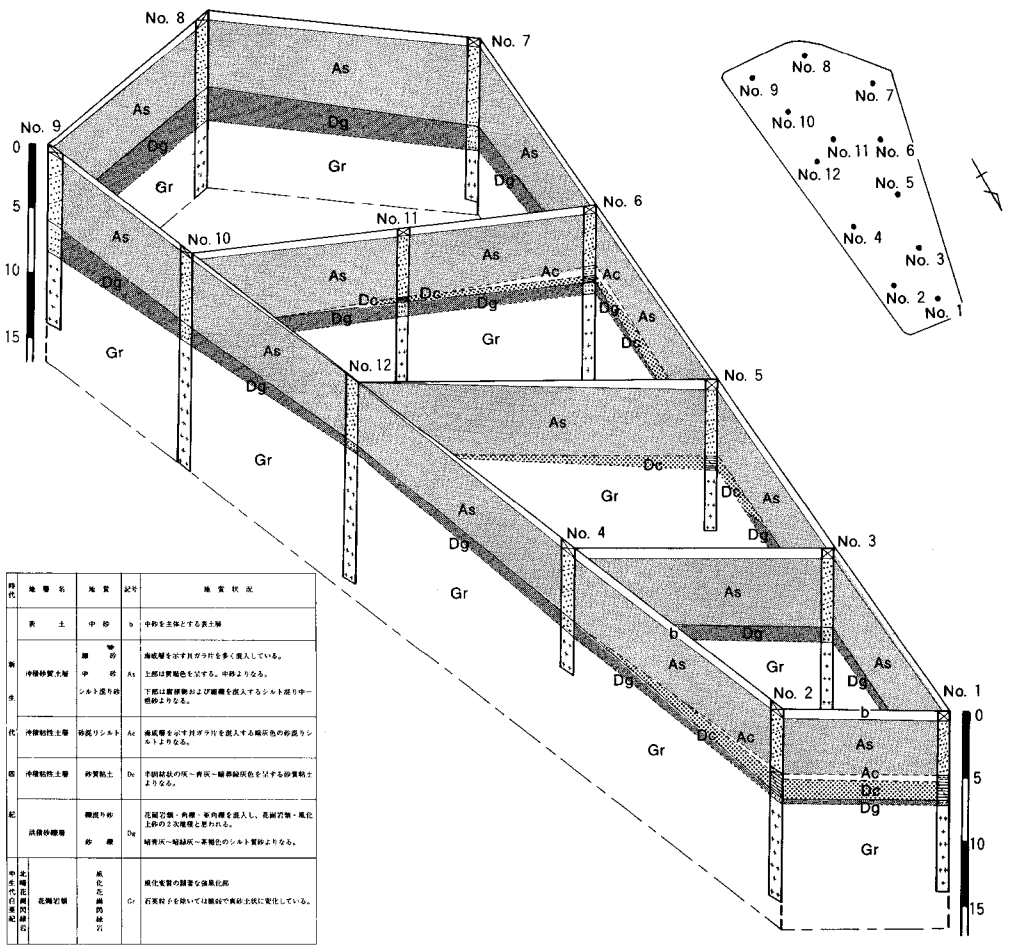


Fig. 5　唐原遺跡地質柱状図

陵が、南には香住ヶ丘丘陵がのびだし、この丘陵の間には唐原川の土砂運搬作用によって作られた標高５ｍ程の狭小な沖積平野が拡がっている。

唐原遺跡周辺の地質は、粕屋平野を表裏に区切る山塊が古生代三郡変成岩層よりなり、その西端部にあたる立花山は、中世代花崗岩類（早良花崗岩・糸島花崗閃緑岩）よりなる。立花山より派生した和白丘陵・香住ヶ丘丘陵は、新生代第三紀層からなり、両丘陵によって囲まれた狭小な沖積平野部では、これら新生代第三紀層が地下に埋没し、新生代第四紀層に覆われている。また、唐原遺跡の南東にある九州産業大学の北側の丘陵の一部には古第三紀層中に花崗岩類の部分的な露頭がみられる。

一方、唐原遺跡は、中世代白亜紀の花崗岩類を基盤とし、その上部に花崗岩に由来する新生代第四紀の未固結層が不整合に堆積している。地層は、上層より(1). 表土層、(2). 沖積砂質土層、(3). 沖積粘性土層、(4). 洪積粘性土層、(5). 洪積砂礫層、(6). 花崗岩類の６層に区分される。花崗岩類は、風化が進行し、真砂土化している。



時代	地層名	地質	記号	地質状況
	表土	中砂	b	中砂を主体とする表土層
新生代	沖積砂質土層	礫砂 中砂 シルト混り砂	As	海成層を示す貝ガラ片を多く混入している。 上部は黄褐色を呈する。中砂よりなる。 下部は黄褐色および褐灰を混入するシルト混り中～粗砂よりなる。
	沖積粘性土層	砂混りシルト	Ac	海成層を示す貝ガラ片を混入する暗灰色の砂混りシルトよりなる。
第四紀	沖積粘性土層	砂質粘土	Dc	半固結状の灰～青灰～緑青緑灰色を呈する砂質粘土よりなる。
	洪積砂礫層	礫混り砂 砂礫	Dg	花崗岩礫・角礫・亜角礫を混入し、花崗岩類・風化土砂の２次堆積と思われる。 暗青灰～暗緑灰～茶褐色のシルト質砂よりなる。
中生代白亜紀	北崎花崗閃緑岩 花崗岩類	風化花崗閃緑岩	Gr	風化変質の顕著な強風化部 石英粒子を除いては脆弱で真砂土状に変化している。

Fig. 6　唐原遺跡　地質パネルダイヤグラフ

Ⅲ 調査の記録

1．調査の概要

唐原遺跡は、試掘調査の所見によれば、調査区のほぼ中央を海岸線に沿って古砂丘の尾根が南北方向にはしり、この古砂丘の尾根上および砂丘が内陸部へむかって低くなる緩斜面上に弥生時代後期から古墳時代前期に亘る多数の竪穴住居址・土壙・柱穴等を中心とする集落址が検出された。遺跡前面には豊かな博多湾が拡がり、この海を舞台に活動した慣海洋性の集落址である可能性が十分に予想され、また、砂丘上に立地することなど等から慎重にかつ多方面に亘る調査が望まれた。同時に、建設される８棟の共同住宅のうち、北側に建設される２棟は昭和59年度中の着工がすでに決定されており、公園用地を含む北側の約5,000㎡については昭和60年２月中旬までの調査終了が果せられたため、発掘調査は北側より開始し、終了次第造成・建設工事と併行して進められることになった。

調査対象地は南北に長く、かつ三角形に近い形状をしていることから長辺に沿って調査区中央の磁北より８°30′西へ振った長軸を任意に設定し、これを基準線として一辺20ｍのグリットを割付けた。この20ｍのグリットは東西方向に西よりＡ・Ｂ・Ｃ、南北方向に北よりⅠ・Ⅱ・Ⅲとした。さらに、これを２ｍ×２ｍの小グリットに細分し、東西方向にａ・ｂ・ｃ、南北方向に１・２・３と呼称し、遺構に伴わない遺物はこの小グリットで取上げた。

発掘調査は、建設予定地20,300㎡全域が調査対象であるため公園用地を含む北側5,000㎡の調査に先立ち、まず、発掘調査事務所設営地から開始し、北から南へと調査区を拡げていくこととした。事務所用地は、北側5,000㎡の調査が急がれることから、試掘調査によって比較的遺構の稀薄とされたＥ・Ｆ－XI・XII区に選定し、10月24日より発掘調査を開始した。

その結果、試掘調査では予想もされなかった直径15ｍの円墳が発見された。この円墳は墳丘に河原石を敷き並べて葺石とし、幅1.5～2.0ｍの周溝を巡らすものであるが、主体部は市営住宅建設に際して削平されていた。周溝には須恵器・土師器の完形品が21個供献されていた。しかしながら、これらのほとんどは仮設事務所保管中に窓ガラスを破って侵入した心ない愛好家によって持ち去られた。考古学を学ぶ者として非常に残念であった。更に、この古墳検出面から15～20㎝掘り下げると弥生時代終り頃から古墳時代前期（布留式期）の竪穴住居址15棟が検出された。この1,000㎡の調査に約１ヶ月を要し、調査工程は、開始早々から遅れだした。

次に、北側より調査に移ると、調査区の中央に海岸線に沿ってほぼ南北方向の古砂丘が検出された。この砂丘は、調査区北端で北へ低くなり、湾奥へつづく砂丘との間に浅い谷様の凹みがあり、古砂丘として独立したものである。この砂丘の尾根上は一面に赤褐色砂で覆われていた。この赤褐色砂（焼け砂）を覆土とする遺構は、すべてが円形あるいは楕円形プランで、深さ15～30㎝の浅い凹レンズ状を呈する炉址であった。これらの炉址の中には、赤褐色砂を中心

としてドーナツ状に灰を掻き出したものもある。構造的には、(1). 素掘りのもの、(2). 底面に粘土を貼ったもの、(3). 底面に5㎝内外の礫石を敷いたものの3タイプに区分される。このうち素掘りのものにも覆土内に焼けた粘土塊を含むものが多くあり、使用後は貼った粘土床および、炉体を破壊したもののようである。覆土中からは弥生時代後期後半の土器片が多数出土するが、土器片は甕形土器が圧倒的に多く、壺形土器は少ない。高杯にいたってはほとんど出土していない。これら土器片の中には二次焼成を受けたものもあり、製塩遺構の可能性も考えられた。しかし、二次焼成を受けた土器片には製塩過程で生じる土器内面の化学変化がないこと、二次焼成痕が弱いこと、粘土を貼った炉床の焼け方が弱いこと、更には、いわゆる「製塩土器」が出土していないことから製塩遺構としては考え難い。(註1)

また、粘土床を作るもののうち、炉壁に沿って凹レンズ状に粘土を貼り覆土に炭片の混入していたものがある。中国雲南省で報告されている原始的な土器窯に多少類する点もあるが、これも断定的ではない。(註2)

これらの炉址は、大小合せると総数300基にものぼり見分けもつかぬ程に重複しているが、その立地する範囲は砂丘の尾根線上のみで、海側や内陸側の緩斜面上にはなく、明らかに砂丘尾根に占地することを意識していたようである。いずれにしてもこの炉址群のもつ意味・性格等および砂丘上に点在するほぼ同時期の竪穴住居群址との関わりを明らかにしてゆくことが今後の整理課題であろう。

この一群の炉址は、砂丘尾根の北端部より営まれはじめ、漸次南へ移動して砂丘の南端まで至っているが、両端部は重複が稀薄であるのに比べ中央部は著しく、そのプランすら摑みかねるものもあった。また、砂丘尾根の中央部にあたるD－Ⅵ区付近で炉址下より竪穴住居址が検出され、炉址と歩を同じくするように南へ移動するが、炉址との間には一定の距離を保っているようである。竪穴住居址同志の切合いはほとんどなく、いずれも炉址下より検出されるが、弥生時代終末期に至ると内陸側の緩斜面上に立地するようになる。

一方、唐原川に沿って南へ舌状に突き出す狭い砂丘尾根には、箱式石棺墓群と円形周溝墓からなる小墳墓群があり、竪穴住居址は後出する1棟を除いてはまったくなく、集落址とは明確に区分されている。時期幅があり短絡的には云い難いが、意識的に聖なる墓域として集落と隔絶していたことだけは明らかなようである。また、最初に発見された円墳の南側にはもう1基の葺石を敷いて周溝を巡らした円墳が発見された。一説によれば、昭和初年頃には遺跡の北方500ｍの湾奥部までの砂丘上に点々と塚があったと云われており、時期的な問題もあるが、立花山から派生した丘陵上に立地する古墳群と比べて考えたとき、非常に興味深い資料となりえよう。

このように試掘調査では予見されなかった成果、問題点を残して発掘調査は終了した。炉址を含む集落遺構は現在整理中で、検討を加え次年度に報告したい。

（註1）　岡山大学教授近藤義郎先生よりご教示を受ける

（註2）　北九州市立考古博物館長小田富士雄先生よりご教示を受ける

2．調査の経過

調査概要については前節で触れたので、ここでは月を追って経過を振返ってみたい。

10月　24日よりユンボによる表土剝ぎを開始し、26日から本格的な発掘作業にかかる。E－XⅡ区で1号墳検出。主体部は削平されている。

11月　月初めから写真撮影・実測にかかる。8・13日に周溝出土遺物が盗まれる。1号墳下層より竪穴住居址群検出、調査区北側の表土剝ぎ開始。

12月　砂丘尾根上に拡がる炉址群の発掘にかかる。検出遺構・遺物が多く写真撮影・実測に時間を要す。電柱の撤去予定が大幅に遅れ、調査工程と排土の移動計画を変更し、調査工程が更に遅れ住宅整備課との協議を重ねる。1号石棺墓検出。

2月　砂丘尾根上の炉址群は更に拡がり、100基を越す。遺構・遺物量が極めて多いことから、協議の末、北側部分の調査終了を1ヶ月延期する。

3月　近藤義郎先生・横山浩一先生・下條信行先生の指導・助言を受ける。中旬より北側調査区の埋戻しを開始し、月末より建設作業にかかる。

5月　調査区を南側に移す。2号墳を検出、全景写真撮影後実測にかかる。2～9号石棺墓と円形周溝墓を検出、副葬遺物なし。土器溜め様のSC－30検出、実測に時間を要する。

7月　梅雨期の長雨で調査区の冠水と夏の暑さのために発掘・実測作業は進まない。板付遺跡(下水道)の発掘調査も併行して行い1人現場が続く。

10月　検出した炉址の総数は300基に達し、下層より竪穴住居址・土壙群を相次いで検出する。

このため調査終了を12月末日とする。

12月　B・C－X・XI区を残して埋戻し終了。29日266号炉址下より最後の竪穴住居址を検出し、写真撮影・実測後埋戻し、30日に調査完了。

▶ST－01発掘風景

▶炉址上に検出された土器群

▶雪中での調査風景

▶200個の完形土器がすてられていたSC－30

▶長雨で冠水した砂丘上の住居地

3．調査の記録

(1) 箱式石棺墓（Fig. 7～10　PL. 3～5）

本調査区内において9基の箱式石棺墓を検出したが、この中には墓壙内に3～4個の石材（塊）を配しただけのもの（SX－04・08・09）もあり、箱式石棺墓とするには多少の疑問の残るものもあるが、ここでは一応箱式石棺墓として取り扱った。

9基の箱式石棺墓は、SX－01が中央部に、SX－02が南東隅部の砂丘尾根、内側の緩斜面上に各々単独で位置するのを除けば、SX－03～09の7基は調査区南端部に群集する。この7基の箱式石棺墓群は、唐原川にむかって南へ舌状にのび出す砂丘の最先端部に立地し、砂丘の尾根上に南北に長く分布する。石棺墓同志の切り合い関係は一切ない。また、副葬遺物が一切なく、明確な時期は決し難いが、SX－01が、弥生時代後期後半期に属する土器群を伴った炉址下より検出されたことから、少なくともこの炉址に先行する弥生時代後期前半期の所産と考えられよう。箱式石棺墓群の立地するこの砂丘尾根突端部には古墳時代前期に属する竪穴住居址（SC－30）1軒を除いては円形周溝墓しかなく、これらの墳墓の営まれた弥生時代後期から古墳時代初頭にかけては明らかに墳墓域として意識され、占地されていたのであろう。

SX－01　（Fig. 7　PL. 3）

本石棺墓は、調査区中央部の砂丘が尾根からの内陸部にむかって低くなる緩斜面上にそれ1基のみであり、砂丘南端部に墓域を作る石棺墓群からは北へ110mの距離にある。また、西方7mのところには砂丘の尾根東縁に沿って弥生時代後期後半の竪穴住居址が5棟南北に並ぶ。

主軸方向をN－24°－Wにとり、蓋石を有する唯一の箱式石棺墓である。墓壙は、長軸2.47m、短軸1.43m、深さ40cmを測る隅丸長方形プランを呈する。両側壁4枚、両小口1枚で長方形に組み合された石棺の内法は、長さ1.47m、幅は北側で19cm、南側で32cmを測る。床面は黄褐色砂を敷いて作り、蓋石までの高さは23cmを測る。側壁と北側小口との間には10～15cmの隙間があるが、石材の不足に起因するものであろう。また、小口部は南から北への圧力を受け南へ傾いている。石材の選び方、棺の幅等から頭位は南側であったと思われる。墓壙および石棺内からは何らの副葬遺物も検出されず、その時期は明確にはしえなかった。しかし、後期後半の遺物を包蔵する炉址除去後に本址を検出しえたことを考えるならば、それ以前の後期前半期の所産と云えようか。

SX－02　（Fig. 8）

本石棺墓は、砂丘南端部に立地する箱式石棺墓群と自然流路を隔てた緩斜面上に唯1基立地し、SX－09より北東方向へ35mの距離にある。また、ST－02の南端に位置し、小口、側壁を含む北側は古墳の周溝掘開時の削平を受けて消失している。

石棺墓は、N－40°－Wに主軸方向をとり、墓壙は、長軸1.51m、短軸1.32mのやゝ楕円形気味の隅丸長方形プランを呈し、深さは50cmを測る。北側小口と側壁の一石は古墳築造時に抜

き取られているが、石棺内法は復原すると長さ90cm、幅24cmで、小口１枚、両側壁２枚で長方形に組まれていたのだろう。東側側壁は西側と高さを揃えるために２石積まれているが、上方からの圧力を受けて上石は外側にずれている。このことからすれば蓋石のあったことが考えられる。出土遺物がまったくなく、古墳よりも古いこと以外は云えないが、概ねSX－01と同時期と考えてさしつかえあるまい。

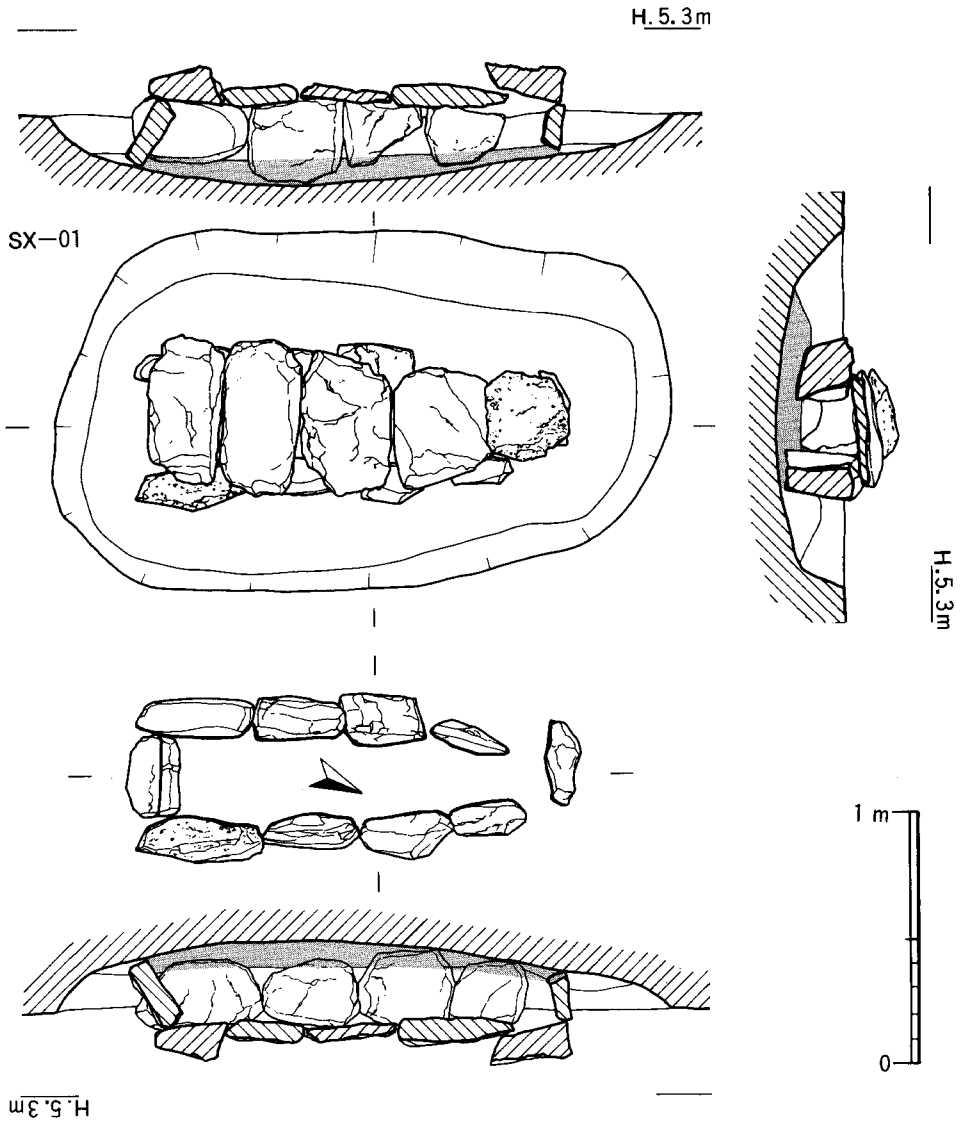


Fig. 7　SX－01実測図（1/30）

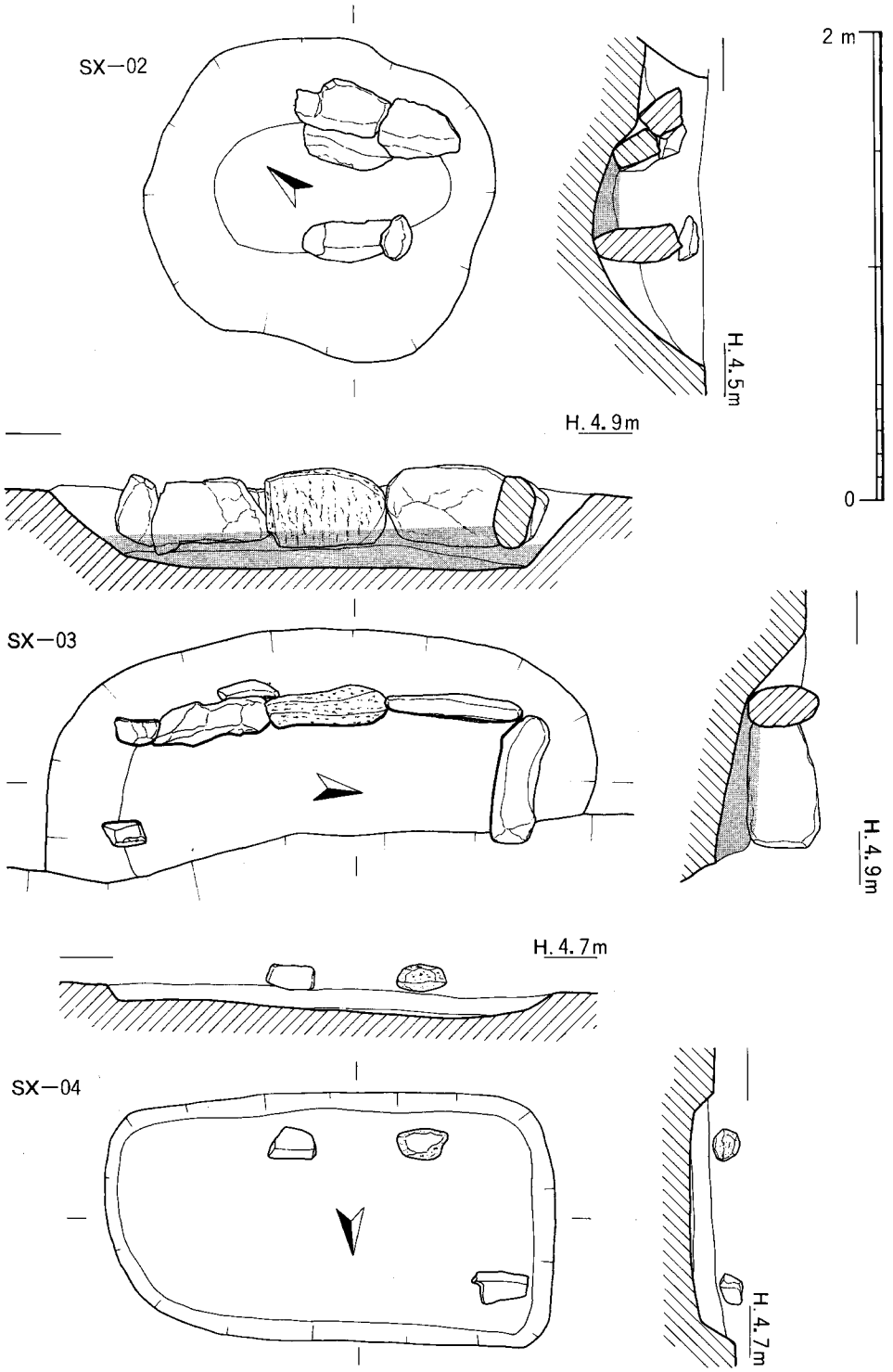


Fig. 8　SX−02〜04実測図（1/30）

SX－03　(Fig. 8　PL. 4)

本石棺墓は、調査区南端に突き出した砂丘尾根上に立地する箱式石棺墓群中で最北端に位置し、SX－04の北方7mの距離にある。東側側壁は住宅建設時に1石を残して破壊されている。

石棺墓は、主軸方向をN－7°－Wにとる。墓壙は、長軸2.39m、深さ46cmを測る隅丸長方形プランを呈し、復原短軸は1.2mとなろう。東側側壁は消失しているが側壁は4石をもってくみ、南小口側は小石を用いている。また、側壁上端の隙間には薄い頁岩材を充てている。石棺内法は、長さ1.54m、幅は32～40cmを測り、南側小口は抜き取られた形跡はなく、板材の使用が想定される。床面は墓壙掘開時の黄褐色砂を詰めて作り、高さ28cmを測る。蓋石の存否は判断できなかった。遺物は1点もなく、時期は決し難い。

SX－04　(Fig. 8　PL. 4)

本石棺墓は、調査区南端の石棺墓群中で北側にあり、SX－09の西3.5mの距離に位置する。

墓壙は、長軸1.93m、短軸1.08mの隅丸長方形プランを呈し、主軸方向をW－3°－Nにとる。墓壙内には15～18cmの石塊が、北側壁には西小口際1個、南側壁には中央に2個配されている。床面に攪乱はなく、側壁・小口石材が抜き取られた形跡がないことから、棺材には板材を用い、石塊を側板・小口板の固定用とした可能性が考えられる。棺内法は、長さ1.55m、幅45cmに復原できよう。

SX－05　(Fig. 9　PL. 4)

本石棺墓は、調査区南端部の尾根上に立地する石棺墓群のほぼ中央に、SX－06と1.5mの距離に近接して位置する。西側は住宅建設時の攪乱によって破壊されている。

石棺墓は、主軸方向をW－18°20′－Nにとる。墓壙は、短軸0.87mを測り、長軸は1.9mに復原できる。石棺は東小口と側壁1枚を残すのみであるが、北側側壁3枚、南側側壁4枚と両小口で長方形に組み合されていたであろう。北側側壁と小口との間には塊石を用いて補充している。石棺内法は、幅23cmで、長さは1.15mに復原しうる。床面は、覆土と異なる淡茶褐色砂を詰めて作り、高さは20cmを測る。副葬遺物は1点もなく、時期は明確でない。

SX－06　(Fig. 9　PL. 4)

SX－05のすぐ南に位置し、東側は住宅建設に際して破壊されている。墓壙も明確ではないが側壁様に石材を配置しており、ここでは一応石棺として取扱った。内法は幅が12cmと狭い。

SX－07　(Fig. 9　PL. 5)

本石棺墓は、調査区南端に拡がる石棺墓群中で南端にあり、東に円形周溝墓が接する。

石棺墓は、主軸方向をW－32°45′－Nにとり、墓壙は、長軸2.18m、短軸1.13mの隅丸長方形プランを呈する。石棺は北側側壁が4枚、南側側壁は3枚、両小口は1枚で長方形に組み合せ、内法は長さ1.34m、幅は東小口側で25cm、西小口側で40cmを測る。床面は黄茶褐色砂を10～15cm詰めて作り、西側半分は淡く赤変しており、ベンガラを塗布していた可能性がある。ま

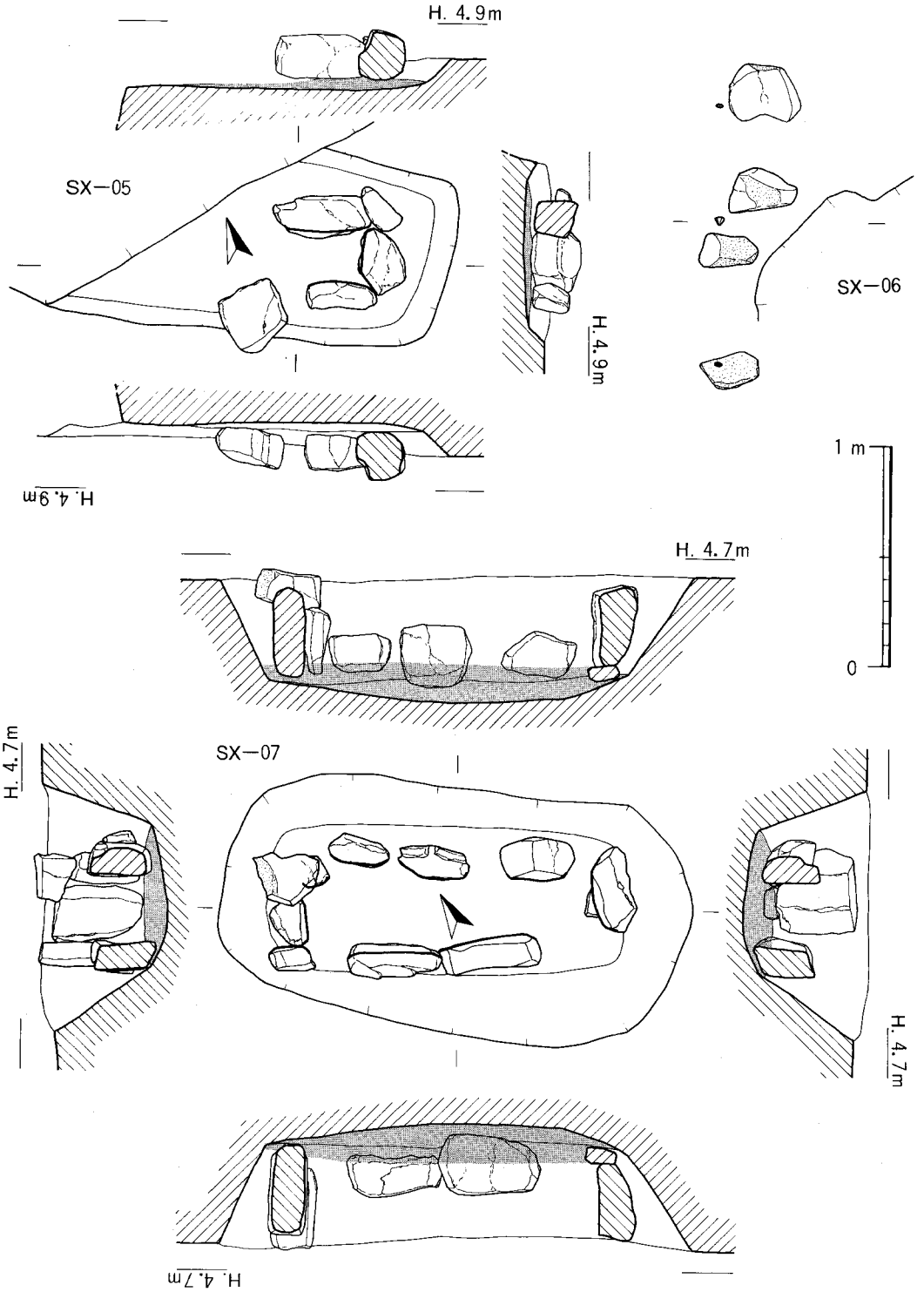


Fig. 9　SX−05～07実測図（1/30）

た、石材が密着しているのは西小口側と南側側壁のみで組み方が粗い。同時に攪乱を受けた跡はなく、埋葬時には、板材を蓋とした可能性が高い。石材の不足に起因するものであろう。

SX－08　(Fig. 10　PL. 5)

本石棺墓は、砂丘尾根上の石棺墓群中で最南端に位置し、西方3mの距離にSX－07がある。

主軸方向をN－36°－Wにとり、墓壙は、長軸1.75m、短軸1.21mを測り、南側は1段平坦面を作る。墓壙内には4個の方形に配置された石塊があり、SX－04同様に埋葬主体等は木棺墓であろう。内法は、長さ1.0m、幅22cmに復原しうる。

SX－09　(Fig. 10　PL. 5)

調査区南端の尾根上に拡がる石棺墓群のほぼ中央に位置し、東方4mの距離にはSC－30がある。

W－31°30′－Nに主軸方向をとり、墓壙は、長軸1.96m、短軸1.18mの隅丸長方形プランを呈する。東小口には扁平な石が床面に密着し、小口石が多少動いた状態で検出されたほかは、西小口の南側に石塊が1個配されていただけであった。攪乱は受けておらず、東小口を除く3壁には板材を用いた可能性が強い。

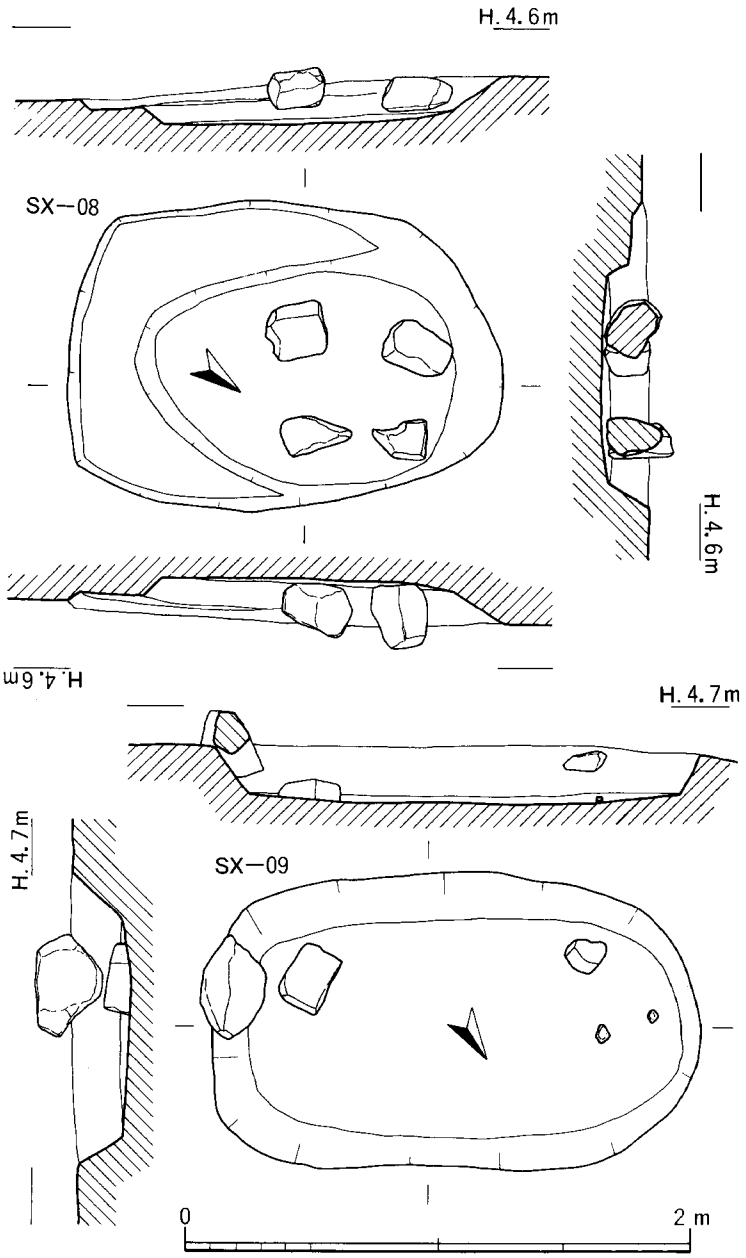


Fig. 10　SX－08・09実測図 (1/30)

(2) 円形周溝墓（Fig. 11・12　PL. 6）

本周溝墓は、調査区の最南部にあり、南北方向にはしる砂丘の屋根が河口に沿ってゆるく東へ屈曲して唐原川に突き出したその最先端部に立地する。南から西にかけては博多湾へ注ぎ込む唐原川の河口が拡がり、その河口にむかって砂丘は急速に落ち込んでいる。また、そのすぐ東側には砂丘より唐原川へむかって南東方向に流れる自然流路があり、砂丘は河口にむかって舌状に突き出した状態にあり、この砂丘突端を意識して占地しているようである。この谷様の流路を挟んで東へ30mの距離に方形周溝遺構が位置している。また、そのすぐ西にはSX－08を南限とする7基の箱式石棺墓群が南北に並ぶように分布し、北方約4mの距離にはSC－30が位置している。

本周溝墓は、東西径8m、南北径7mを測り、ほぼ正円形を呈した小型の円形周溝墓で、砂丘の屋根先端を有効に活用して構築している。周溝の東側が2ヶ所で新しい溝に切られている。周溝は、溝幅0.75～1.0mを測るが南・東側が多少狭くなる傾向がある。深さは10～20cmと浅く、

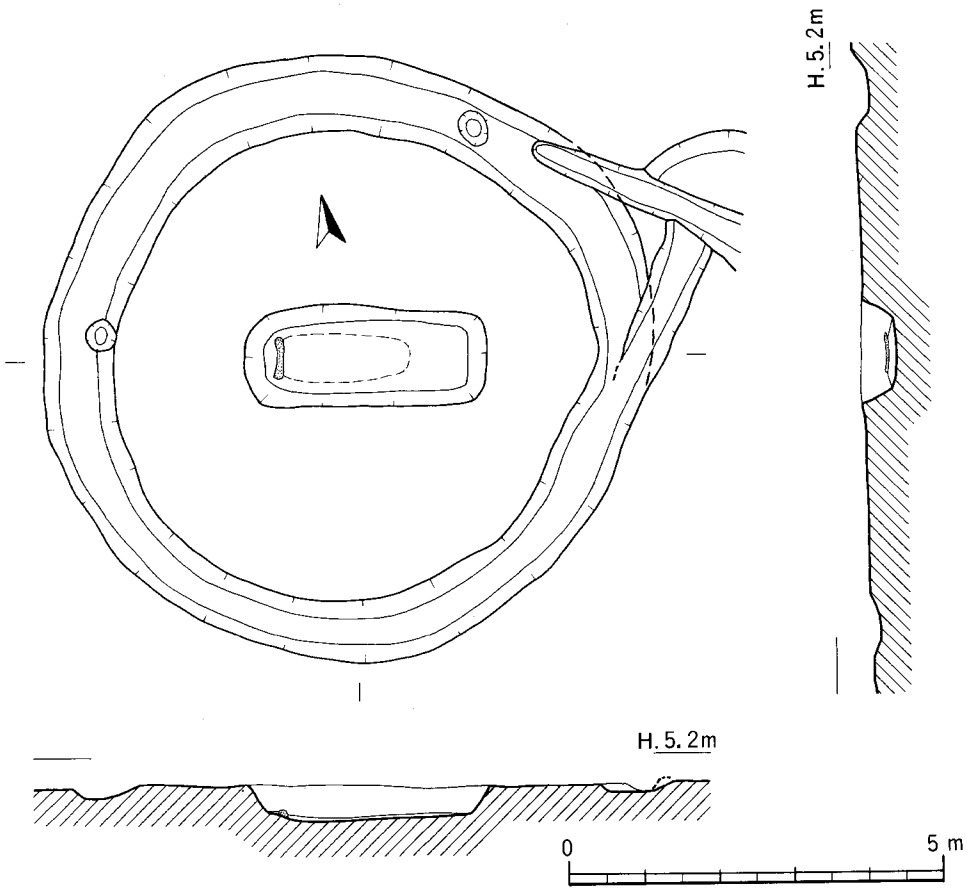


Fig. 11　円形周溝墓実測図（1/100）

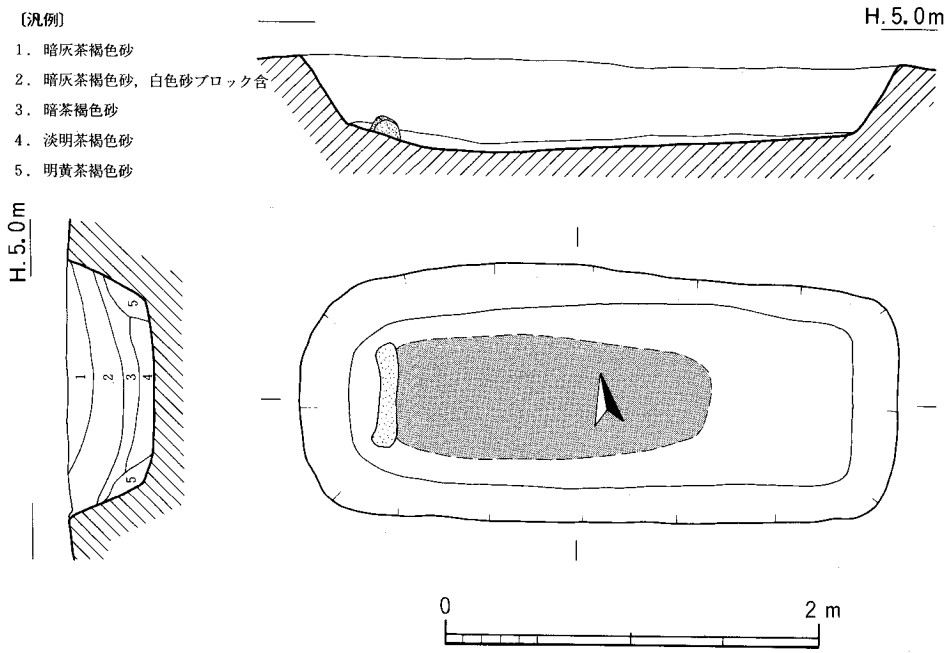


Fig. 12　円形周溝墓主体部実測図（1/40）

断面形は逆台形を呈する。周溝は途切れて陸橋等の施設を作ることなく全周し、囲繞された台状部中央には東西方向に主軸をとる大きめの主体部がある。周溝覆土は淡茶褐色砂１層のみで、台状部に封土をもつか否かは土層の観察からは明確にしえなかった。しかし、砂丘上は台地に比べて壊れやすく、かつ埋没しやすいことを考えると後出する円墳の葺石のように封土の流失を防ぐ施設が必要であろうが、それに見合う石等は検出されておらず、封土はなかったとみるのが自然のようである。また、仮にあったとしても周溝の砂を掻き上げた程度のきわめて低平なものであったろう。

埋葬主体部　（Fig. 12　PL. 6）

円形台状部のほぼ中央部に位置し、主軸方位をW－11.0°－Nにとる木棺墓である。墓壙は、長軸3.2m、短軸1.37mを測る隅丸長方形を呈する。深さは50cmを測り、壁面はゆるく傾斜して立ち上がる。西側小口には壁面より15cmの所に、幅８～13cm、長さ55cmの粘土帯があり、小口板を固定したものであろう。なお、この粘土帯は覆土と異なる暗黄褐色砂を帯状に作り、その上に灰褐色粘土を薄く巻くように貼ったものである。また、北・南壁際には側板と墓壙との間に詰めたと思われる明黄茶褐色砂が固く締った状態で確認されたことから木棺墓と考えてさしつかえあるまい。床面は浅い凹レンズ状を呈するが、西側がやゝ低くなる。また、粘土帯から東へ1.65mの範囲は床面の砂が多少赤味を帯びており、木棺内に赤色顔料が塗布されていた可能性がある。副葬品等の遺物はほとんどなく、主体部内より２個の鉄小片を検出した他は弥生土器・土師器の小片が少量出土したにすぎない。

(3) 方形周溝遺構（Fig. 13）

本遺構は、調査区の東南隅部の砂丘が東へむかって低くなる緩斜面上に位置する。ST－02の東方約５ｍの距離にあり、この間に位置するSC－25を西側溝で切っている。全体に市営住宅建設時の削平を受けており遺存状況は良くない。

周溝は、西側周溝が10ｍ、北側周溝が3.7ｍ、南側周溝が7.5ｍを測り、各隅部がわずかに丸味をもって屈曲するいわゆる「コ」字形を呈している。溝幅は、西側周溝で最大幅1.7ｍ、北側周溝で最小幅0.7ｍを測る。深さは削平によるものか15～20cmと浅く、断面形はおおむね逆台形を呈するが、北側周溝はやゝU字形に近い。これは溝幅の狭いことに起因するのかも知れない。また、北側周溝はやゝ外開き気味になっておさまり、この周溝の途切れは方形周溝墓における陸橋部を想定しうる。周溝覆土は淡茶褐色を呈する。

本遺構は、東側が調査区外にあるために全容は明確にしえないが、全体的にみれば、一辺が11ｍの方形に区画された小型の周溝墓であろうが、台状部に主体部を検出しえなかったことから敢えて方形周溝墓とはしえなかった。また、出土遺物がまったくないため時期は決定できないが、SC－15を切っていることから弥生時代末を上限とするものである。

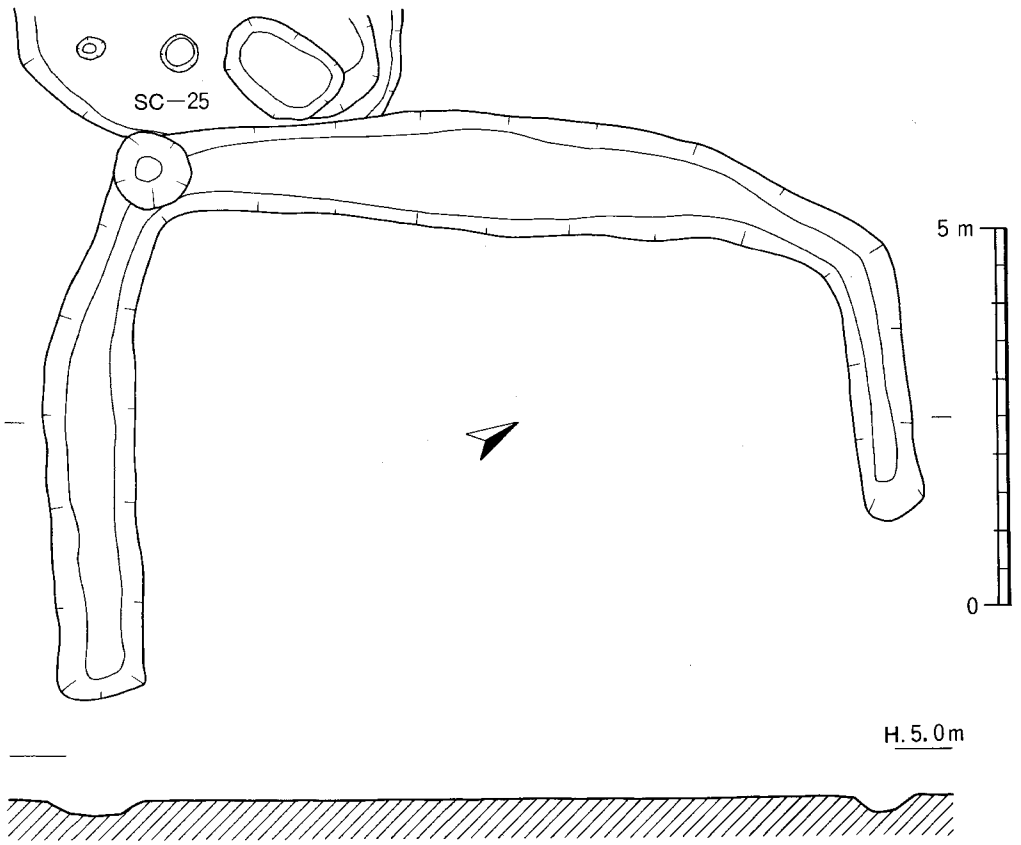


Fig. 13　方形周溝遺構実測図（1/100）

(4) 古　墳

本調査区内において、直径15～17mを測る小型の円墳を2基検出した。2基の円墳はいずれも溝幅2～3mの周溝が巡り、墳丘には河原石を敷き詰めて土溜めの葺石としているが、市営住宅建設に際して墳頂部が削平されており、埋葬主体部は検出されなかった。

これら2基の円墳は、調査区を南北にはしる砂丘尾根の東側、砂丘が尾根から内陸部へむかって除々に低くなる緩斜面上に立地し、約12mの距離をおいて南北に並んでいる。古墳は調査区の南東隅に箱式石棺墓群、円形周溝墓、方形周溝遺構と隣接してまとまり、砂丘尾根上に拡がる炉址・竪穴住居址群と重複することなくひとつの墳墓域を作っている。乱暴ではあるが、墓域としての意識が長く受け継がれていたのかもしれない。

ST－01　(Fig. 14・15　PL. 7・8)

本墳は、調査区南西の砂丘が尾根から内陸部へむかって次第に低くなってゆく緩斜面上に立地し、ST－02より北方12mの距離にある。古墳は弥生時代終末の竪穴住居址(SC－08・10・12・14・15) を切って構築され、北側は攪乱坑、南側は水道管坑によって破壊されている。

古墳築造に伴う地山整形は、墳丘基底面の整地と、その外側を全周する周溝の掘削と云う二つの作業工程より行われている。

周溝は、墳丘を全周し、溝上端部での直径は14.8mを測り、正円形を呈する。溝幅は上面で2.5～3.0m、底面で0.8～1.2mを測る。深さは外側で55～70cm、現存する葺石の上端からは75～95cmを測り、断面形は概ねU字形を呈する。溝底は北が浅く、南が深くなっている。

墳丘は、周溝内側の整地面を基底面として盛土を行ない、全面に葺石を敷いている。墳裾からの直径は東西径が11.6m、南北径は11.2mを測る。葺石は、周溝底面より20～30cmの高さに径40～50cmの大ぶりの転石を基石として横位に据え、その上に15～30cmの丸石をていねいに積み上げており、現状では4～7段が残っている。葺石のその大半が変成岩質で、花崗岩、砂岩質のものも少量混じっている。葺石面の傾斜角度は26°～29°でゆるやかである。失われた墳丘を復原すれば、葺石確認面より1.2～1.5mの間におさまるものであろう。

埋葬主体部は精査したが検出できなかった。削平により消失したものであろう。本墳の西20mの地点から削平された葺石材が検出されているが、石室材と思しき石塊はなく、また、墳丘が比較的低いことから主体部は粘土槨か木棺直葬の可能性が考えられる。

一方、周溝の東側より双耳の須恵器高杯を含む完形土器が21個体供献されていたが、そのほとんどが心ない人によって盗まれてしまい現存しない。

出土遺物　(Fig. 16　PL. 11)

杯　蓋(1)　口径13.9cm、器高4.5cm。口縁部はやゝ外方に開き端部と稜はシャープである。

杯　身(2)　口径10.8cm、器高5.1cm。口縁部は受け部より大きく内傾し、端部は丸くおさめる。

小型壺(3)　口径10.5cm。器壁は薄く、口縁部は頸部で屈曲して大きく外方に開く。

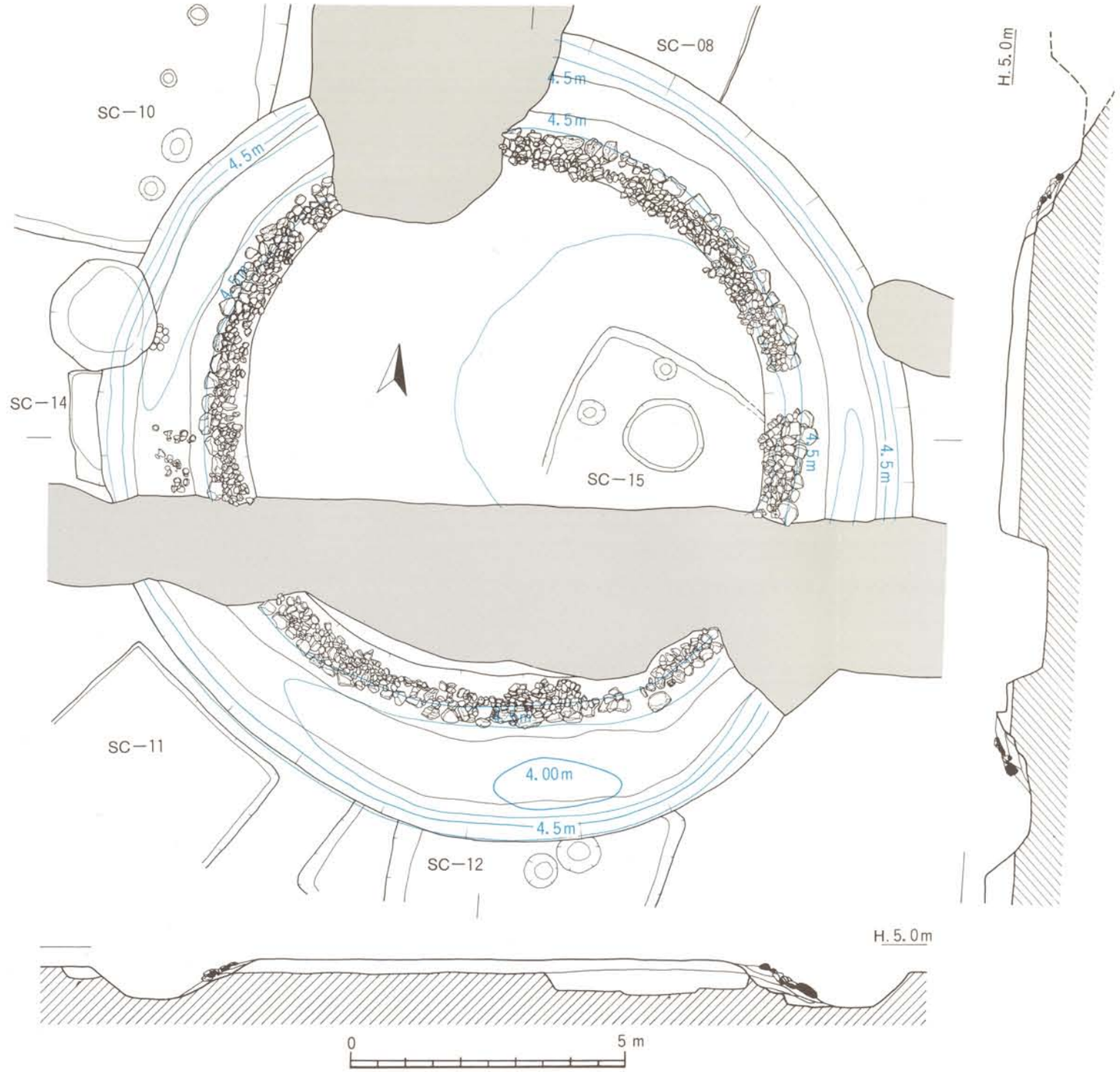


Fig. 14　ST－01実測図（1/100）

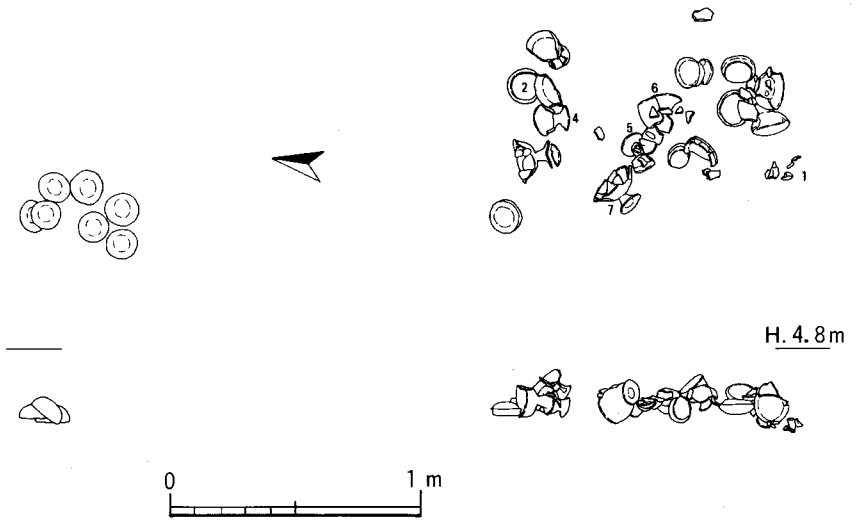


Fig. 15　ST－01周溝内遺物出土状況（1/30）

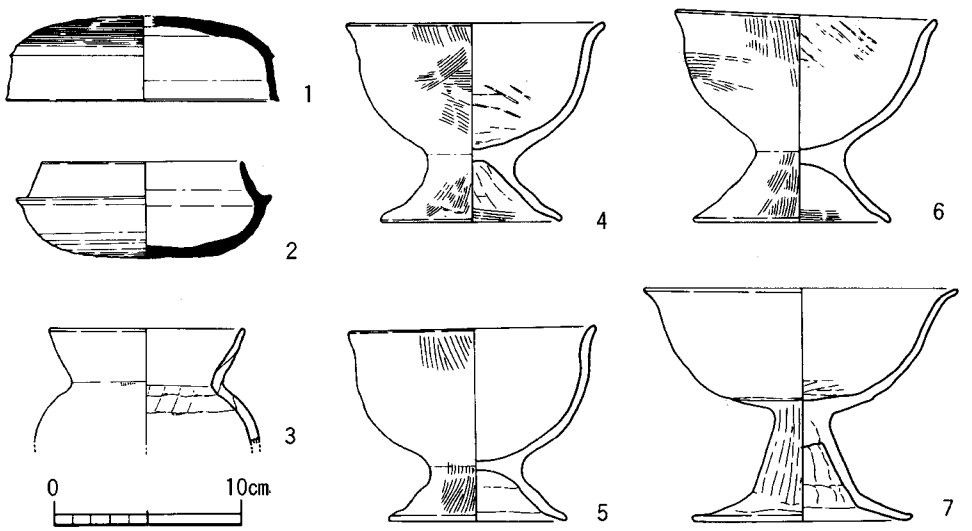


Fig. 16　ST－01周溝出土土器実測図（1/4）

高杯（4～7）周溝東側より出土した土師器の一括遺物である。4～6は、杯部が椀状に大きく膨らみ、口縁部は端部を小さく外方に摘み出して作っている。脚部は短かくやゝ外方に膨らむ。法量は、口径・脚径・器高の順に、4が13.8cm、9.7cm、10.5cm。5は13.2cm、9.5cm、10.1cm。6は14.0cm、10.6cm、10.9cm。7は口径16.8cm、器高12.3cm。4～6に比べ全体にスマートになり、杯部下半に小さな稜を作る。いずれも仕上げは粗く、色調は明赤褐色。

ST－02　(Fig. 17　PL. 9)

本墳は、調査区南東隅部の緩斜面上に位置し、ST－01より南方12mの距離にある。古墳は、周溝の南側で箱式石棺墓（SX－02）を切って構築され、周辺には弥生時代終末から古墳時代の竪穴住居址6棟（SC－24～29）が取り巻くように分布しているが切り合い関係はない。古墳の東方5mの距離には方形周溝遺構がある。また、南西を流れる自然流路を隔てた砂丘尾根上には円形周溝墓・箱式石棺墓群が拡がる。

古墳築造に伴う地山整形は、墳丘を巡る周溝の掘開とその内側、すなわち墳丘基底面の整地と云う二つの作業工程からなる。

周溝は、墳丘を全周し、溝上端部での直径は17.6～18.0mを測り、ほぼ正円形プランを呈する。溝幅は上面で3.4～4.35m、底面で0.8～1.5mを測り北側が幅広くなる。深さは、外側で0.4～0.6m、葺石面からは1.0～1.2mを測る。溝底面は概ね平坦で、断面形は逆台形を呈し、西側が一段低くなっている。

墳丘は、周溝内側の整地面を基底面として盛土を行ない、全面に葺石が巡る。墳裾からの直径は、東西径が13.6m、南北径が14.0mで、ST－01より一まわり大きい。葺石は、溝底面より30～50cmの高さよりはじまり、基本的には30～40cmの大ぶりの転石を基石として横位に据えているが、基石を置くことなく小石を葺いているところもあり、ST－01に比べてその葺き方は非常に粗い。基石の上には10～25cmの小型の丸石を積み上げているが、積み方が粗雑なせいか周溝内への落石が多くみられた。葺石は変成岩質のものが多いが、花崗岩・砂岩質のものもある。葺石面の傾斜角度は26°～28°とゆるやかであるが、南東側は34°内外とやゝ急角度になる。消失した墳丘を復原すると、墳裾より2m内外の高さになろう。

埋葬主体部はすでに削平されているが、状況からして粘土槨あるいは木棺直葬であった可能性がきわめて高い。

遺物は、土器のほか鎌・鋤先・刀子等が周溝の西および南東側から比較的まとまった状態で出土したが、ST－01にみられるような一括供献と云うものではなかった。

出土遺物　(Fig. 18～21　PL 11・12)

壺形土器（8～12、23～26・34）8～12は墳丘内、23～26は周溝より出土し、袋状口縁のもの（8・24）、二重口縁のもの（9・23）、小型壺（10～12・34）がある。9・23の口縁部は屈曲して外方に開く。23は山陰系の壺で口径16.2cmを測る。口縁部には横凹線が巡る。胴部外面がヘラケズリの他はヨコナデ。11・12は外方に開く口縁部が一旦屈曲して垂直に立ちあがる、いわゆるS字状口縁のものである。口径は、11が8.0cm、12が10.2cm。胴部内面はヘラケズリ。34は口径13.8cm、器高10.5cm。外面はハケ目、内面はナデ・ヘラケズリ。

甕形土器（13～20、27～33）口縁部は「く」字状を呈するが、胴部が球形に膨らむもの（16～18、27・28）と直線的に窄まるもの（13～19、29～31）がある。28は口径14.8cm、器高21.6cm

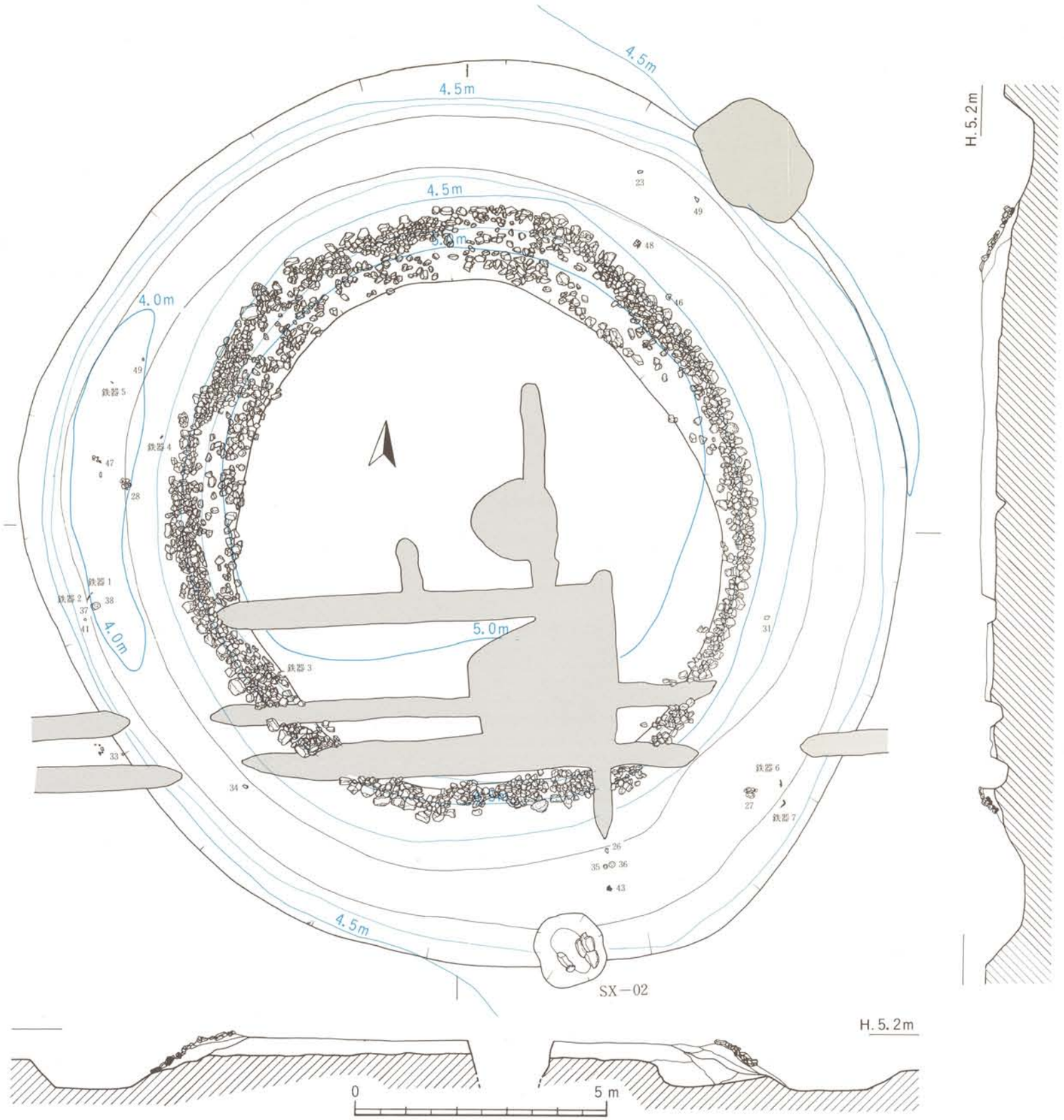


Fig. 17　ST－02実測図（1/100）

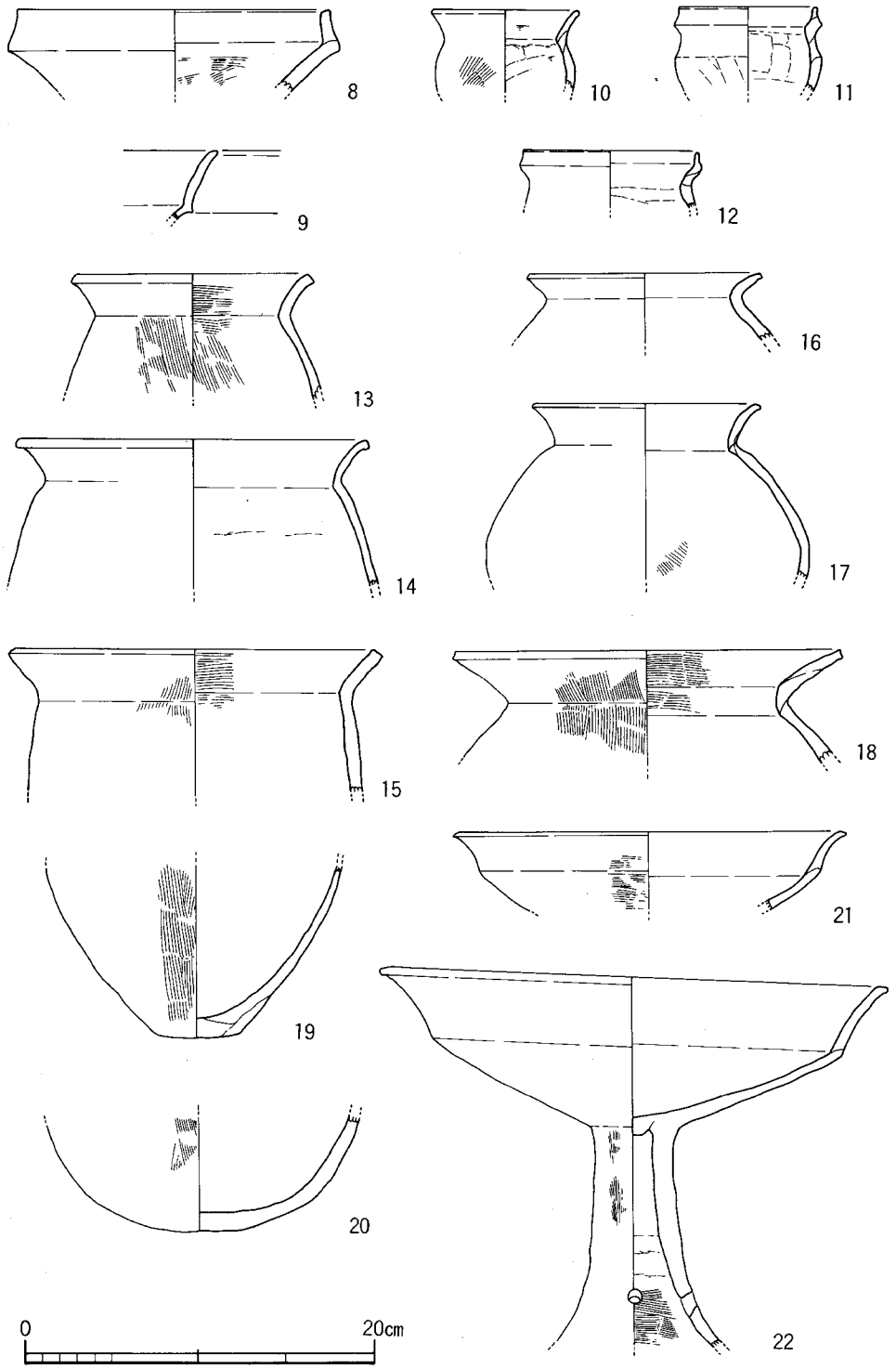


Fig. 18　ST－02墳丘出土土器実測図（1/4）

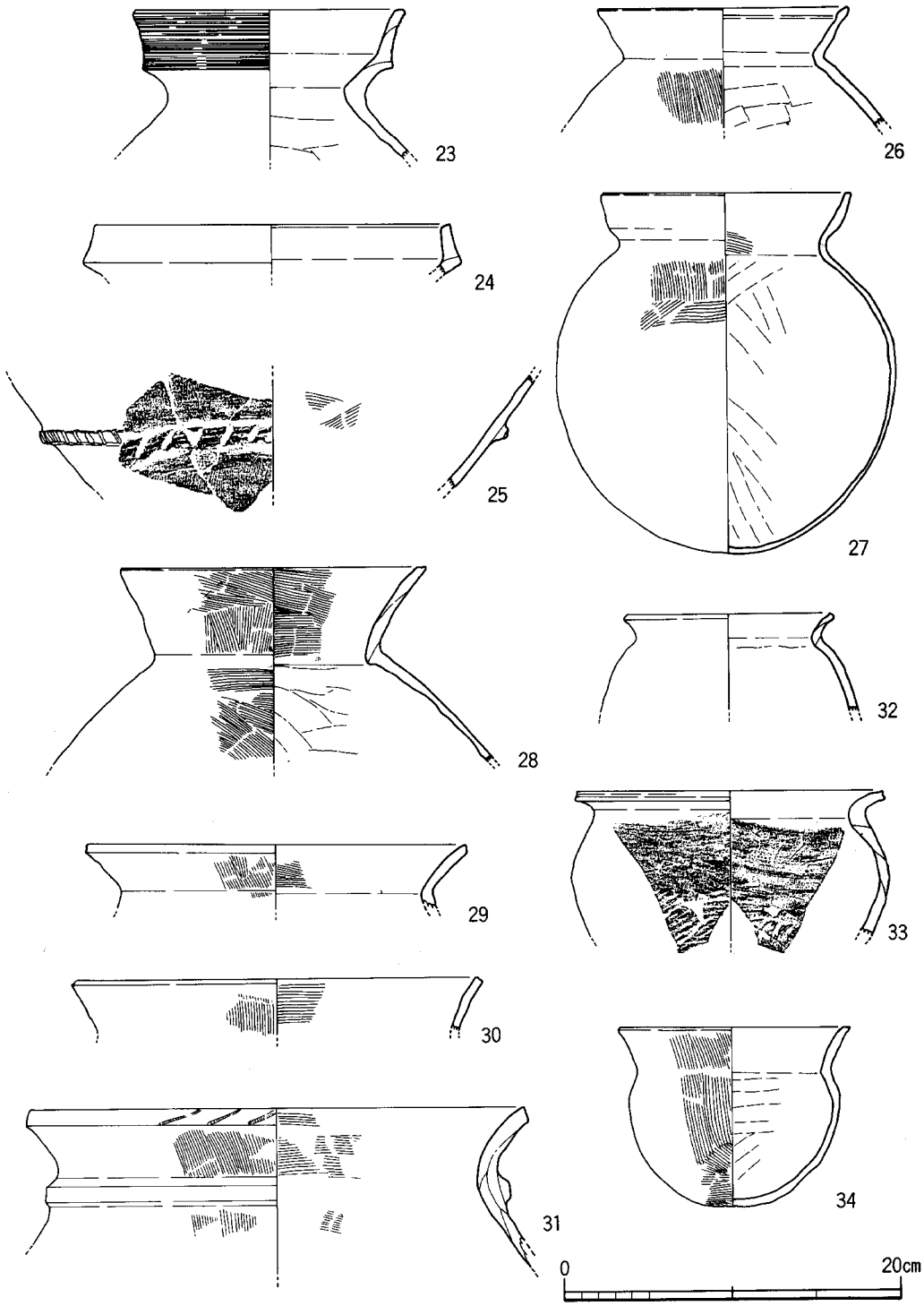


Fig. 19　ST－02周溝出土土器実測図１（1/4）

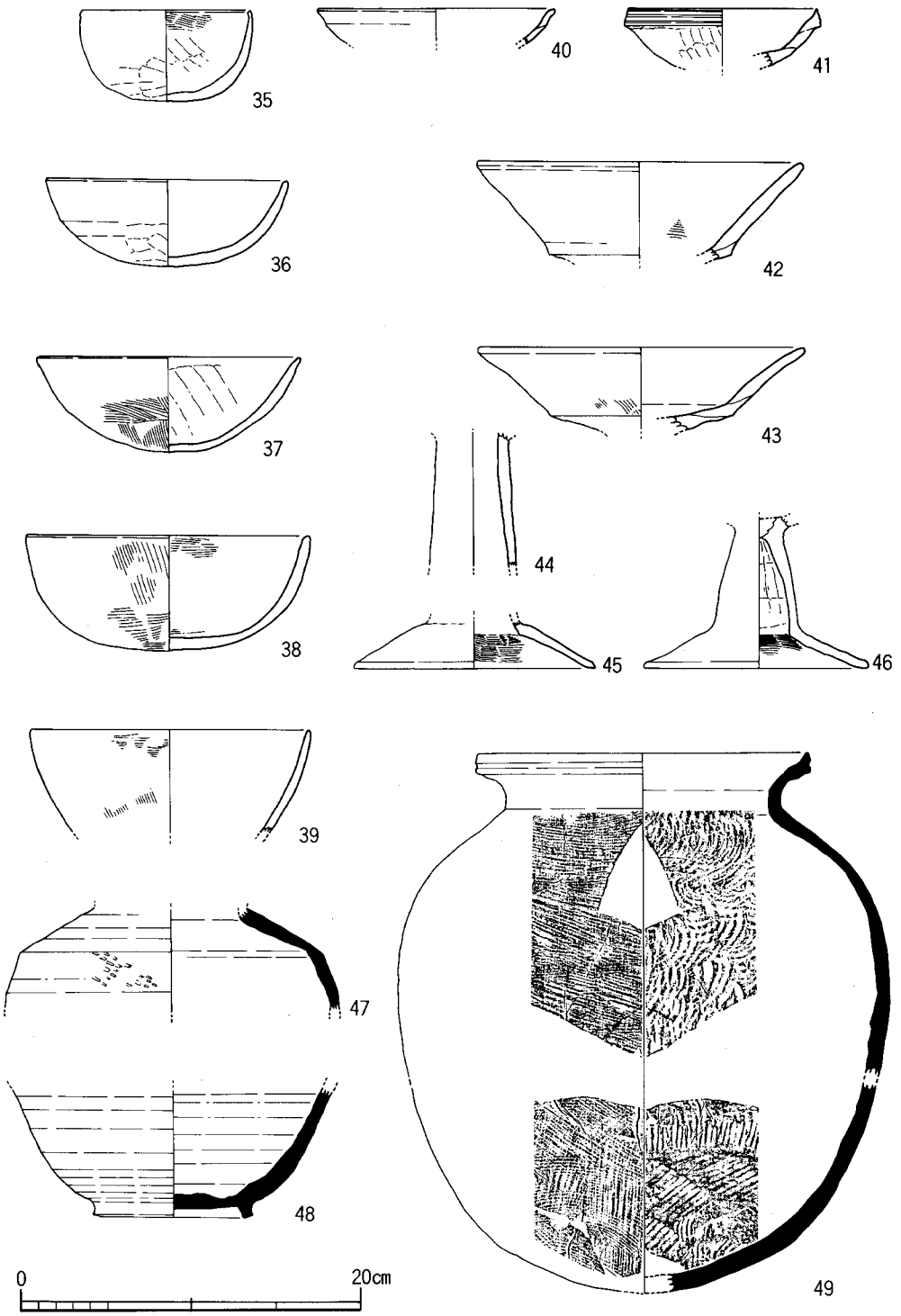


Fig. 20　ST－02周溝出土土器実測図２（1/4）

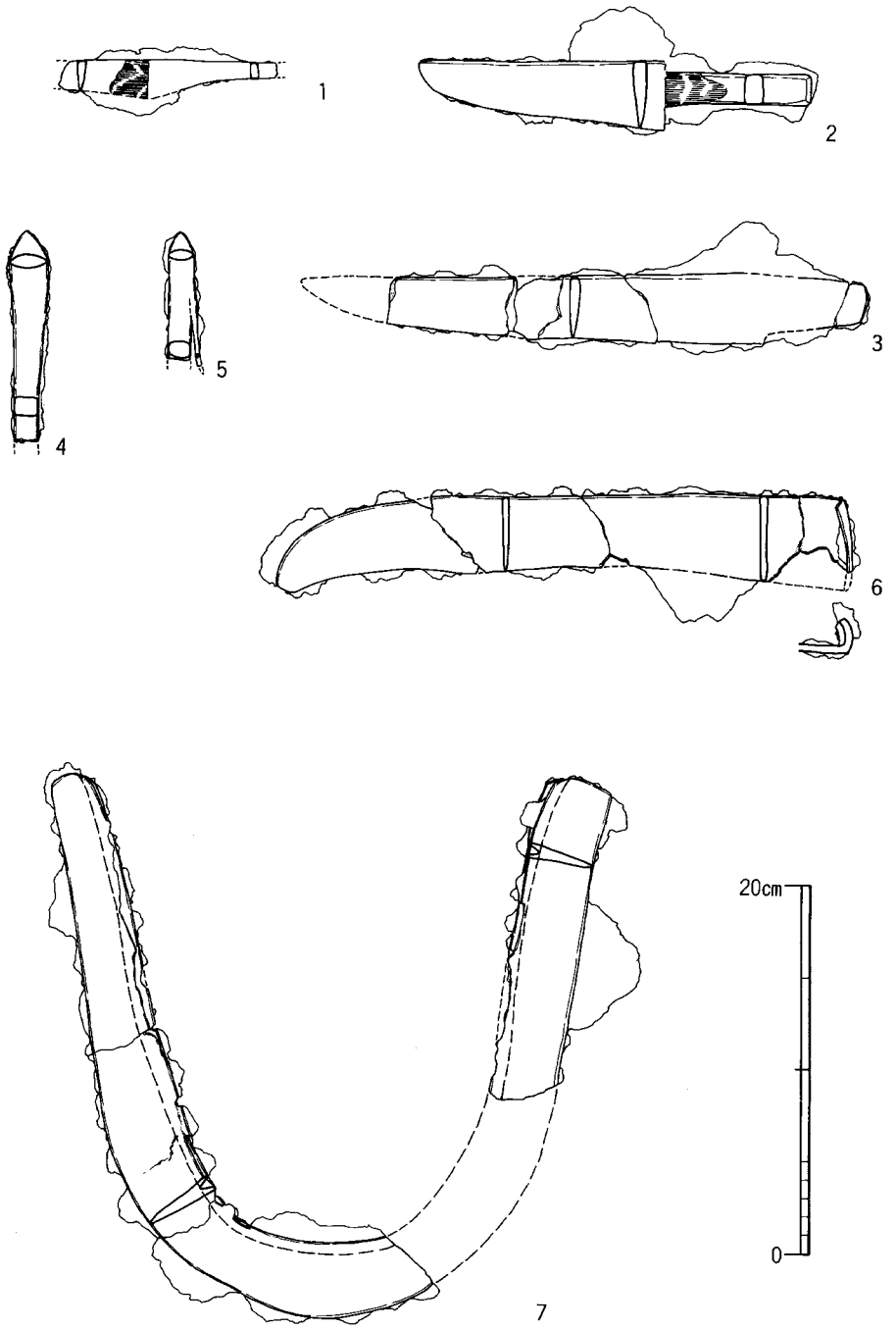


Fig. 21　ST−02出土鉄器実測図（1/2）

を測るいわゆる布留式の甕で卵形の胴部をもつ。33は鉢に近いもので口径18.3cmを測る。

椀形土器（35～39）口縁部が垂直に立ち上がるもの（35）と緩く外反して立ち上るもの（36～39）がある。口径は、35が9.9cm、36が14.4cm、37が15.6cm、38が16.6cm、39は16.6cmを測る。

高　坏（21・22、43～46）22は口径29.3cm。大きく開いた坏部に短い反り気味の口縁部がつく。21・22・44は西新式、43・45・46は布留式のものであろう。

器　台（41・42）42は口径19.5cmの鼓形器台で山陰系のものである。41は小形器台であろう。

須恵器壺（47・48）47は肩部直下に格子目叩きを残す。48は底径9.4cmの高台がつく。

須恵器甕（49）口径19.4cm、器高32cm。胴部外面は平行叩き、内面は青海波叩きが残る。

刀　子（1～3）1は刃部が内湾し、断面は二等辺三角形をなす。2は全長10.7cm、刃部長6.7cmで、茎部に木質が残る。

鉄　鏃（4・5）4は現長5.7cm。身の断面形は菱形に近い。5は棘状突起がつく。遺存状態は良好である。

鉄　鎌（6）全長15.6cm、身幅2.0cm、背厚3mmを測る。完形品で柄部は折り返し、刃部はわずかに内湾気味になる。

鋤　先（7）全長14.7cm、刃部幅14.4cmを測る。刃部中央はやゝ尖り気味になり、U字形を呈する。木質を挿入する部分は前・背二面に分れ、耳部近くまで刃部がつく。

(5)　火葬墓（Fig. 22　PL 10）

本址は、調査区の南側、唐原川へむかって舌状にのびた砂丘尾根の東側に流れる浅い谷様の自然流路の上端（流水口）に位置し、調査区南部に拡がる墳墓群の中間点にあたる。

本址は、N－37°－Wに主軸方向をとり、墓壙は径97cmの円形プランを呈するが、北西側に浅く張り出している。深さは18cmでゆるく窄まり、底面は浅い凹レンズ状を呈する。墓壙内には、30～40cmの扁平な石塊が2個配され、赤く焼けている。また、西側石塊は熱のために先端部が割れている。墓壙底面には焼け残った炭片が堆積し、これに混じって頭蓋骨・背椎骨片等の人骨が出土した。

墓壙出土の遺物は1点もなく、明確な時期は決し難いが、本遺跡出土遺物の中で最も新しいものに糸切りの小皿があり、この時期をあてることも可能かもしれない。

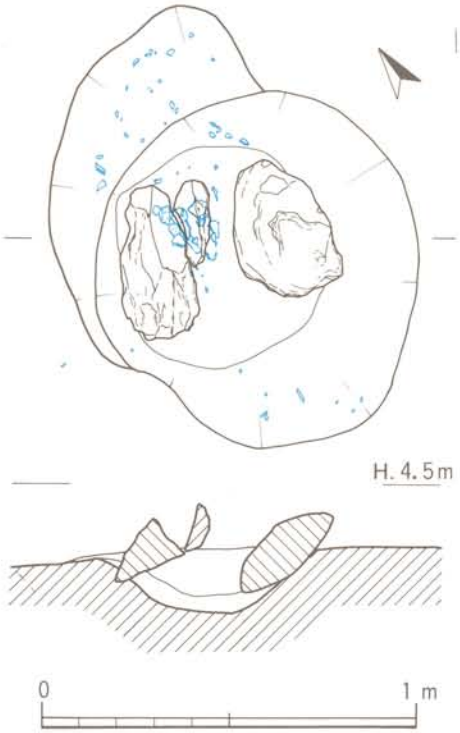


Fig. 22　火葬墓実測図（1/20）

Ⅳ おわりに

博多湾は、玄界灘にむかって湾口を開き、ここを大きな玄関口として各時代に亘って様々の文化を受け入れてきた。この博多湾の最奥部には、奈多浜・塩浜・和白浜の海岸砂丘がつづき、立花山から派生した低丘陵が、これらの砂丘に覆い被さるようにしてのびている。このためかこの地域における遺跡の密度はきわめて薄く、考古学的調査も、昭和45年の和白遺跡群、昭和54年の下和白塚原古墳群の発掘調査以来絶えて久しいものであった。

このような中で実施された唐原遺跡の発掘調査は、白浜砂丘の南端に位置する小砂丘を完掘する結果となり、試掘調査時の予察をはるかに越える成果をもたらした。発掘調査では、小砂丘の尾根上に拡がる300基に達する炉址群、竪穴住居址（90棟）、土壙（120基）等の集落性遺構と、9基の箱式石棺墓、円形周溝墓、方形周溝遺構と2基の円墳からなる墳墓群を検出した。古墳を除く遺構は、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期に比定しうるものであり、この時期における海浜性集落のあり方、墓地との関わりや生産活動等を考える上で貴重な資料となりうるものである。

今回報告した墳墓群は、遺構・遺物量ともに少なく、2基の円墳を除いては時期決定を明確にしがたい。同時に、集落址遺構との関わりを考えることなく、それ自体で論をなすことは不可能である。集落址遺構（竪穴住居址・土壙・炉址等）の整理作業が緒についたばかりの今、これらとの問題等をこと細かく述べえなく、また、時間的制約と勉強不足のためにその調査成果を十分に深化しえなかった。ここでもう一度、これらの調査成果を整理しなおして今後に備えたいと思う。

1．箱式石棺墓群について

本調査で検出した箱式石棺墓は9基であるが、その検出状況はSX－01・07の2基を除いては決して良好とは云えないものである。また、墓壙内に塊石を配しただけで構造的には石棺墓とは云い難いもの（SX－04・08・09）もあるが、墳墓としての機能が十分に想定されるために多少の疑義を生じながらも、一応この範疇でとり扱った。

これらの箱式石棺墓群は、北から南へのびる古砂丘の屋根上に立地している。このうち、SX－03～09の7基は唐原川へむかって、舌状に突き出した古砂丘の屋根先端部に南北に長く並んで占地し、一群をなしている。この古砂丘の屋根先端部は、箱式石棺墓群と円形周溝墓1基のほかにはやや離れて、後出する竪穴住居址1棟が立地するのみで、集落址遺構とは明らかに生活空間を画し、墓域としての意識が明確に示されている。

本遺跡の箱式石棺墓は基本的構造において弥生時代に通有にみられる箱式石棺墓と何ら変るところはないが、その石材の組み方がきわめて稚拙なことである。攪乱をまったく受けていな

いSX－01・07についてみると、SX－01は、扁平な板石を石蓋として石棺上面に被せる一般的なものであるが、足位にあたる北側小口石と側壁石との間には10～15cmの隙間がある。SX－07は、頭位にあたる西側小口石と側壁石とが接して組合されているほか、かなりの隙間をもって作り、石材も不揃いである。石蓋はなく、石棺内が一気に埋った形跡もないことから、板材を用いて石棺を被う蓋としたことが想定される。また、SX－03は、東側側壁が破壊されているものの頭位にあたる北側小口石と側壁石は丁寧に組まれているが、南側小口石は当初よりなく、これも板材をもって小口材としていたようである。本遺跡の箱式石棺墓は、石材を頭位は丁寧に組むが、足位は隙間をもって粗く組み、全体としてはやゝ粗雑な構造を示す。

一方、SX－04・08・09は、墓壙内に２～４個の塊石を配するのみで箱式石棺墓とは云いえない。この中で、SX－08は墓壙内に４個の塊石を方形に配する。この塊石を固定材とし、その内側に板材を組んで棺としたことが想定され、本棺墓とした方が妥当なのかも知れない。棺内法は長さ1.55ｍ、幅45cmに復原され、SX－03と同規模になる。SX－04・09も同様の構造が復原される。

このように、本遺跡の箱式石棺墓は構造的には粗雑で、石材の不足を板材を充てることによって一種の省力化を計っている。これはその立地性と石材の確保が困難であったことに大きく起因するものであろうが、単にそれだけによるものか、あるいはもっと何らかの要因によるものかは判然としがたい。また、これらの箱式石棺墓は、小さな墓域を作り、その規模・内容に大きな差異がなく、隔絶した副葬遺物をもつものがないことから特定の集団墓としてより小家族墓としての理解が自然のようである。

２．古墳について

本遺跡では、調査区の南東部で２基の古墳を検出した。古墳は古砂丘の屋根内側の緩斜面上に立地し、古砂丘尾根に沿って南北に12ｍの距離をおいて並んでいる。

古墳は、径11～14ｍの小型の円墳で、幅２～３ｍの周溝を巡らし、墳丘には葺石を敷きつめている。葺石は、30～50cmのやや大型の転石を横位に据えて基石とし、その上には10～20cmの丸石を積み上げて葺いている。古墳のすぐ南を流れる唐原川の河原より運び来ったものであろう。埋葬主体部は、いずれも消失しているが粘土槨あるいは木棺の直葬であったろうことが想定される。これは先述の箱式石棺墓と同じく石材の確保困難にもよるのであろうが、むしろ石室構築に際する立地上の問題に大きく起因するものと思われる。

次に、古墳構築の時期について、ST－01は、周溝内に供献された一括遺物から実年代を想定すれば、６世紀前半代の時期が与えられよう。この一括遺物は調査中に盗難にあい、ほとんどが現存しないが、中には杯部下半に櫛描きの波状文を施こし、そこに双耳の把手がつき、脚部には透しを施こした高杯があり、やや古い様相を残している。ST－02は、周溝内出土の遺

物からして、ST－01に遅れて構築されたものであるが、7世紀末から8世紀代の遺物が混入しており、この時期まで周溝はいくらかの凹みを残していたものであろう。

本遺跡の古墳は、群を構成する最小単位の2基であり、さらに調査区外東側に拡がることも想定されるが、増えたとしても1～2基であろう。昭和初年頃には遺跡の北500mの和白浜あたりまでの砂丘上には点々と塚があったと云われており、この白浜から和白浜までの古砂丘上には数群の小古墳群があったものと思われる。

次に、唐原古墳群周辺に展開する古墳群の年代と形成について概観すると、まず香住ヶ丘丘陵に粘土槨を内部主体とし、三角縁二神二獣鏡を副葬する香住ヶ丘古墳（第Ⅰ期）が出現する。この海に面した地域を包括した強力な首長クラスを想定しうる。5世紀以降になると、古墳群の造営は、本遺跡北方にのびる和白丘陵に移る。5世紀後半から6世紀初めには、竪穴式・竪穴系横口式石室を内部主体とする飛山古墳群（第Ⅱ期）があり、若干の空白期をいおて6世紀後半には猿の塚古墳・下和白塚原古墳群・高見古墳群（第Ⅳ期）が造営される。この期には内部主体も横穴式石室へと移行する。唐原古墳群（第Ⅲ期）は、和白丘陵で最初に出現する飛山古墳群（第Ⅰ期）につづくもので、猿の塚古墳、下和白塚原古墳群との間の空白期を埋めるものである。一旦北方の丘陵地帯へ移行した古墳の造営地が、6世紀代の一時期に突如砂丘地帯の白浜に移り、再び北の和白丘陵へと移ってゆく背景となるものについては言及しえないが、非常に興味深い現象であり、今後の課題となりえよう。

また、本古墳群をはじめとするこの地域の古墳群は、その群構成が単独あるいは3～5基と総じて少なく、かつあり方が散在的である。これは、福岡・早良平野周辺の丘陵や山麓に濃密に分布する古墳群と比べると、その規模・数において劣勢であり、特殊と云わざるをえない。眼下に広大な沖積地をもつ福岡・早良平野においては、その経済的基盤を豊かな農業生産力に求めることが可能である。反面、後背地としての可耕地を欠く本古墳群周辺の地域においては、農業生産力に経済的基盤を求めることは不可能と云わざるをえず、これに大きく起因するであろうことは容易に考えられる。

砂丘上に立地する本遺跡に可耕地を求むれば、谷水田的な小規模なもの以外になく、海との関わりの中にその経済的基盤を求めえよう。出土した石錘・釣針等の漁撈具をはじめ、竪穴住居址の発見は漁撈集団の性格を有する慣海洋的色彩がきわめて強く、本古墳群の被葬者もその慣海洋性的性格を具備していたことが想定される。云い換えれば、唐原古墳群の被葬者は漁撈集団を包括する突出した人々であったと云いえよう。

博多湾に面した古砂丘上の墳墓遺跡は、方形周溝墓・前方後円墳を検出した博多遺跡群、三角縁神獣鏡を副葬した方形周溝墓を検出した藤崎遺跡、弥生時代の甕棺墓群からなる西新町遺跡・姪浜新町遺跡等が挙げられる。

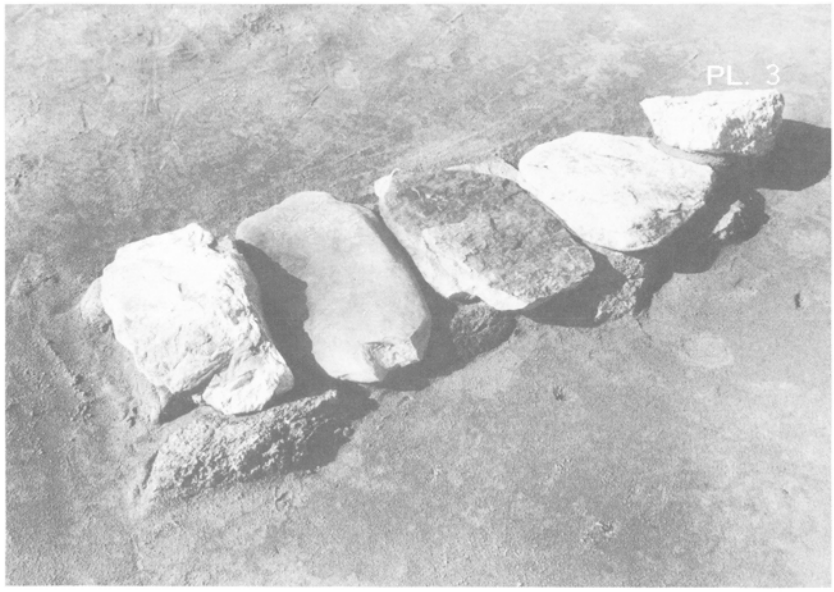
PLATES

唐原遺跡周辺航空写真

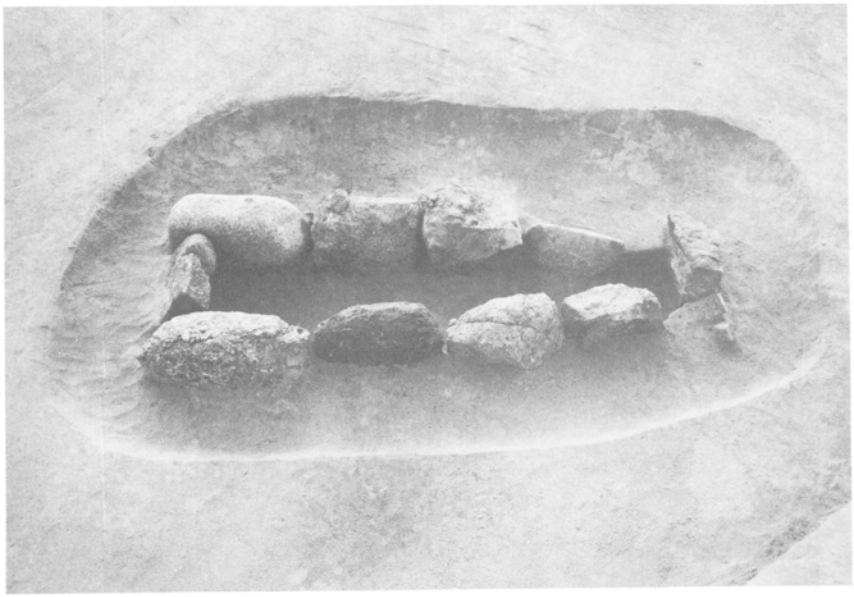
PL. 2

▲調査区全景（東上空より）

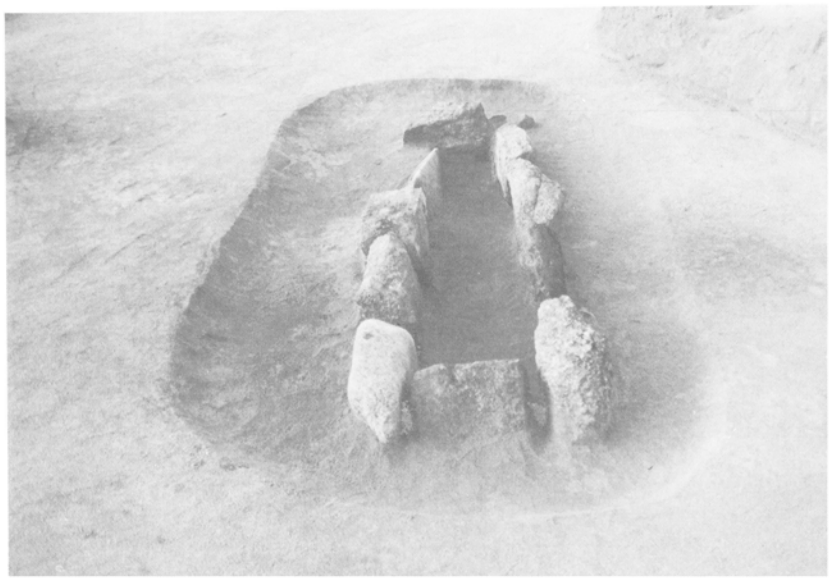
調査区全景（南上空より）▼



▶SX—01全景

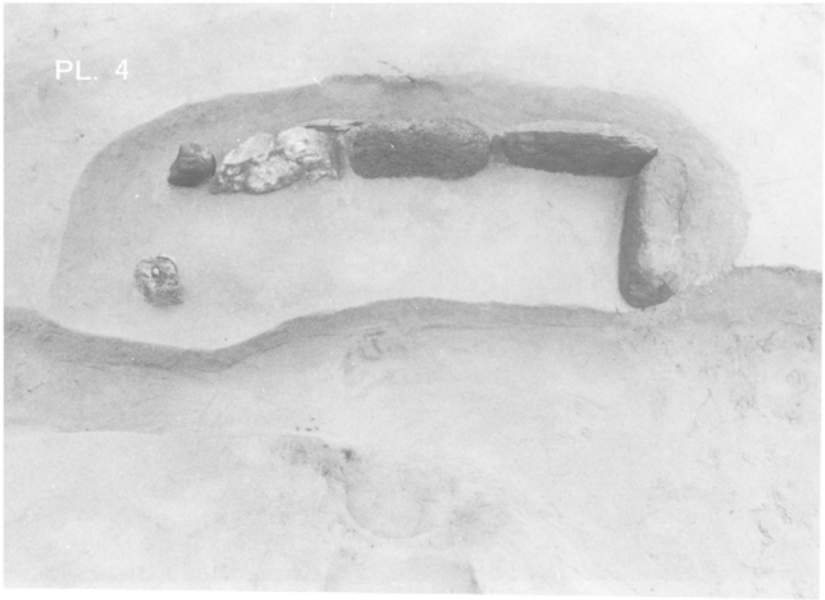


◀SX—01全景（蓋石除去後）

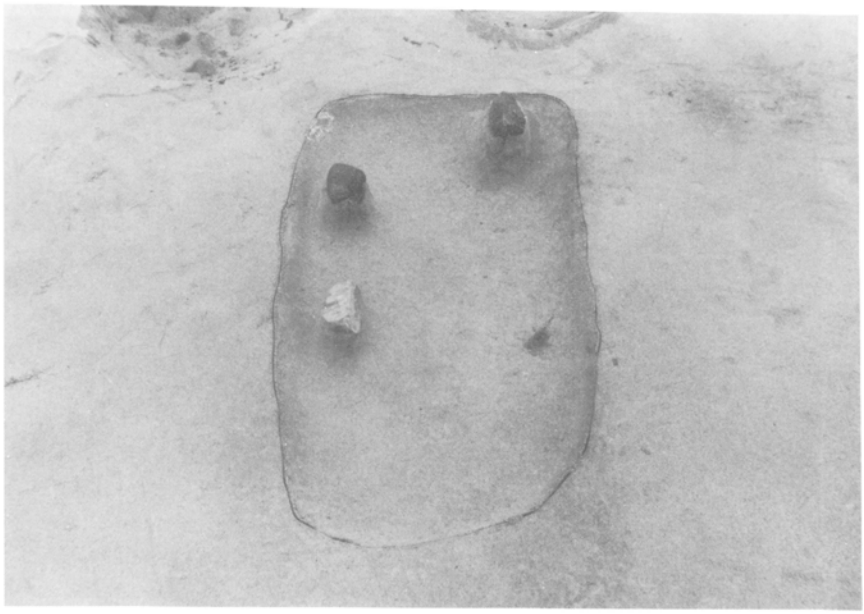


▶SX—01全景（蓋石除去後）

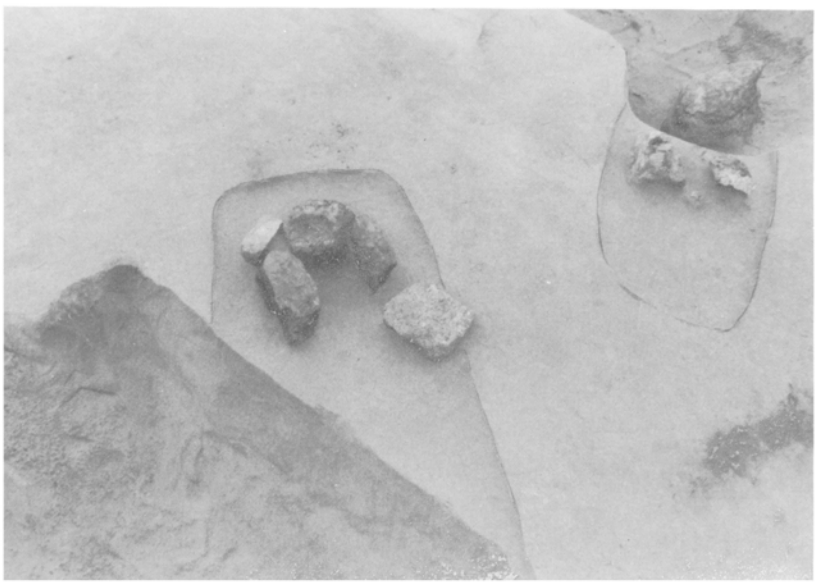
PL. 4



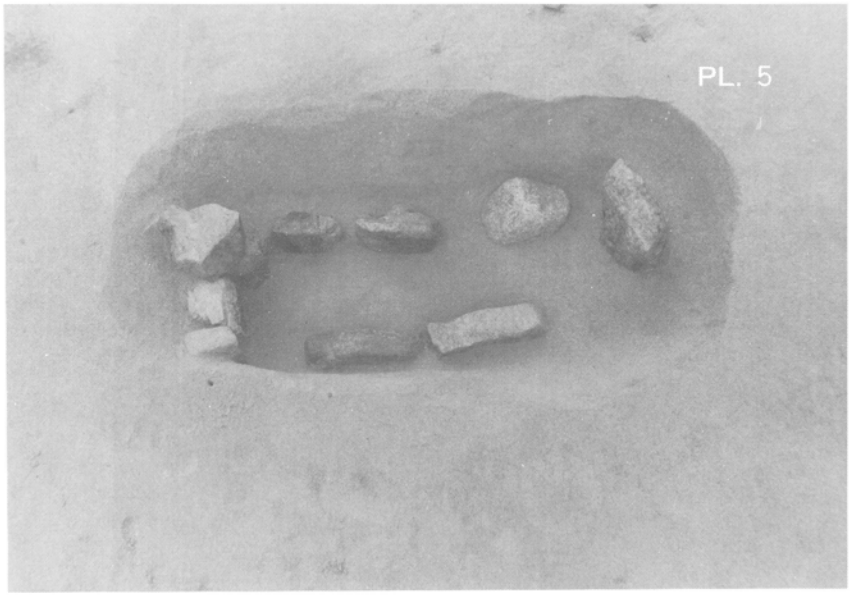
◀SX—03全景



▶SX—04全景

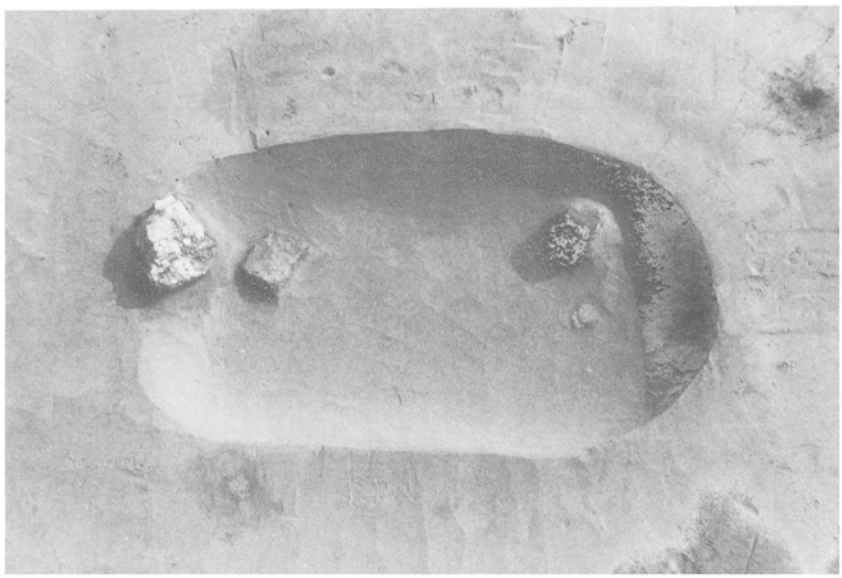


◀SX—05・06全景



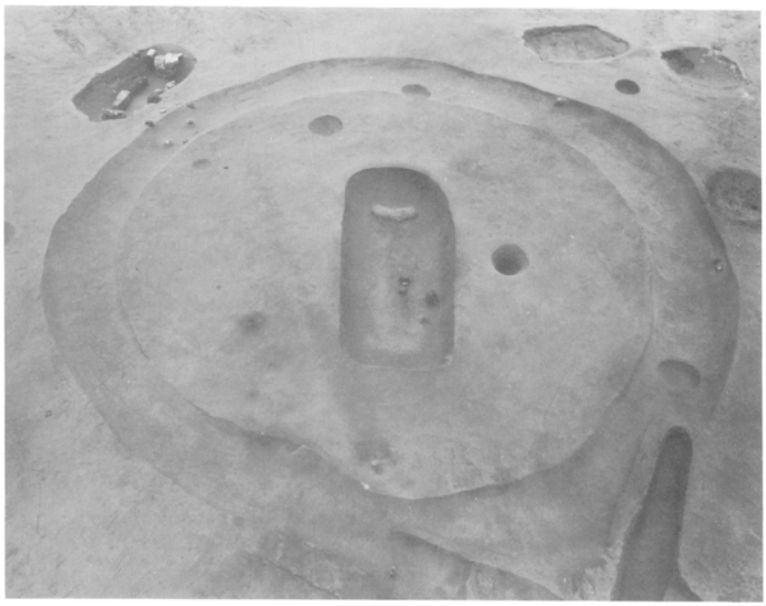
▶SX—07全景

◀SX—08全景



▶SX—09全景

◀円形周溝墓全景

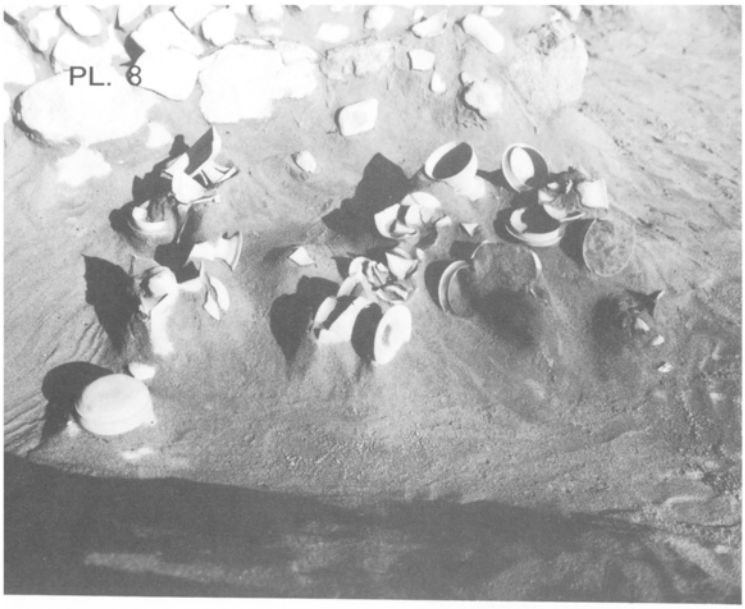


▶円形周溝墓近景

◀円形周溝墓主体部全景

▲ST－01全景

ST－01近景▼



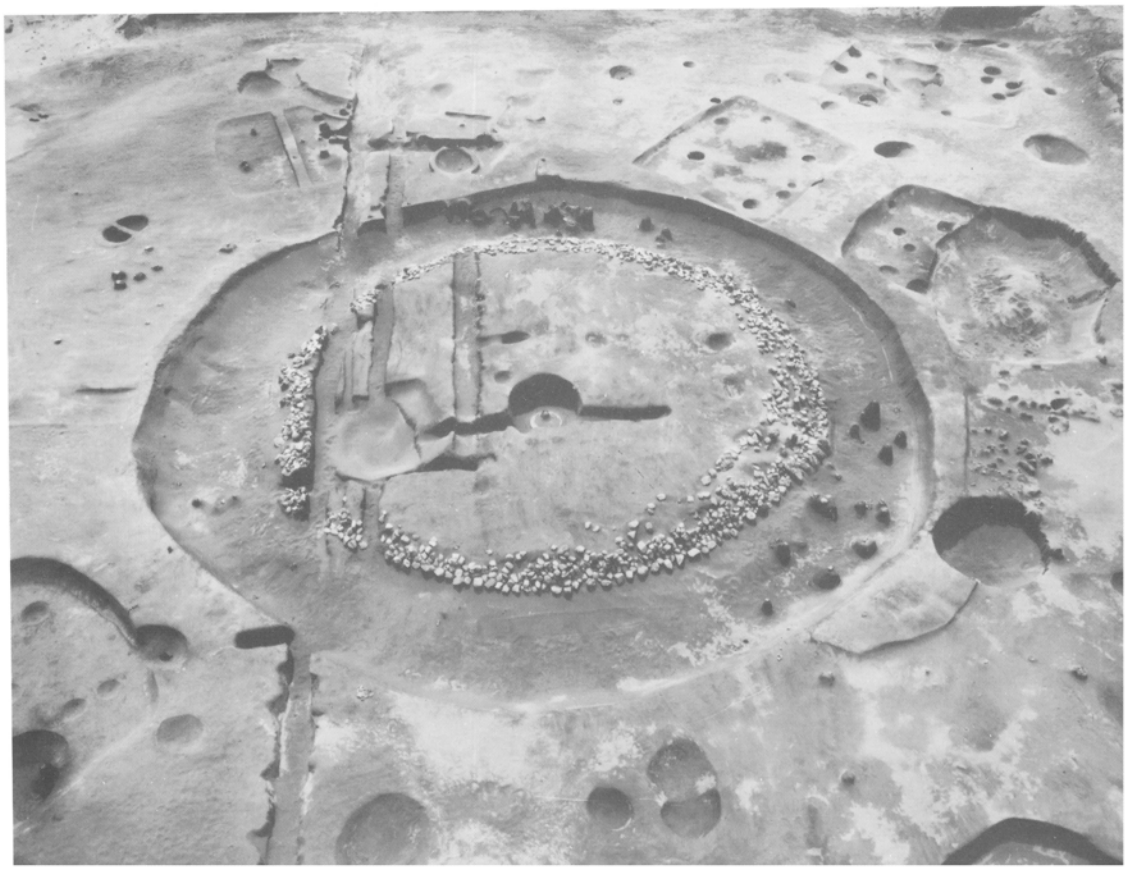
◀ST—01周溝内遺物出土状況

▶ST—01葺石細部

◀ST—01葺石細部

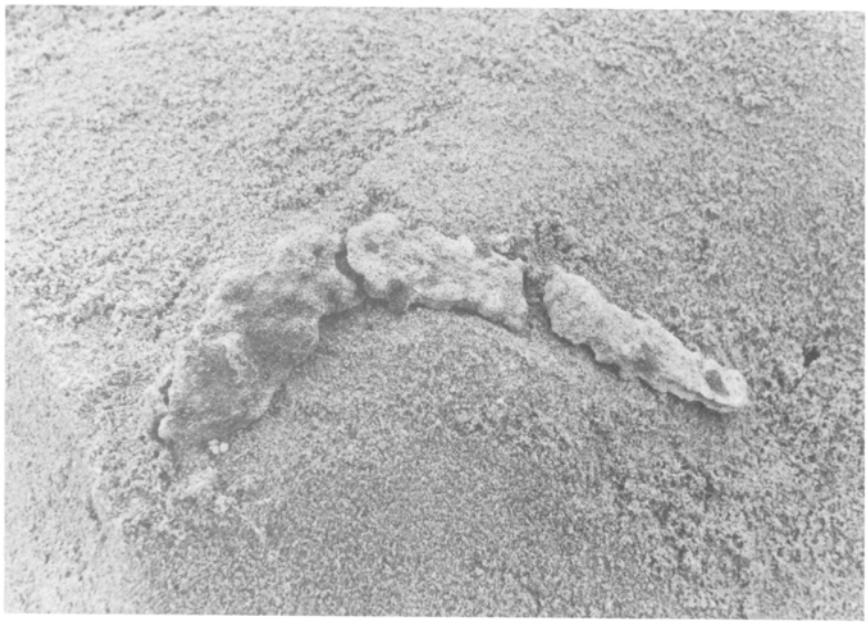
▲ST－02全景

ST－02近景▼



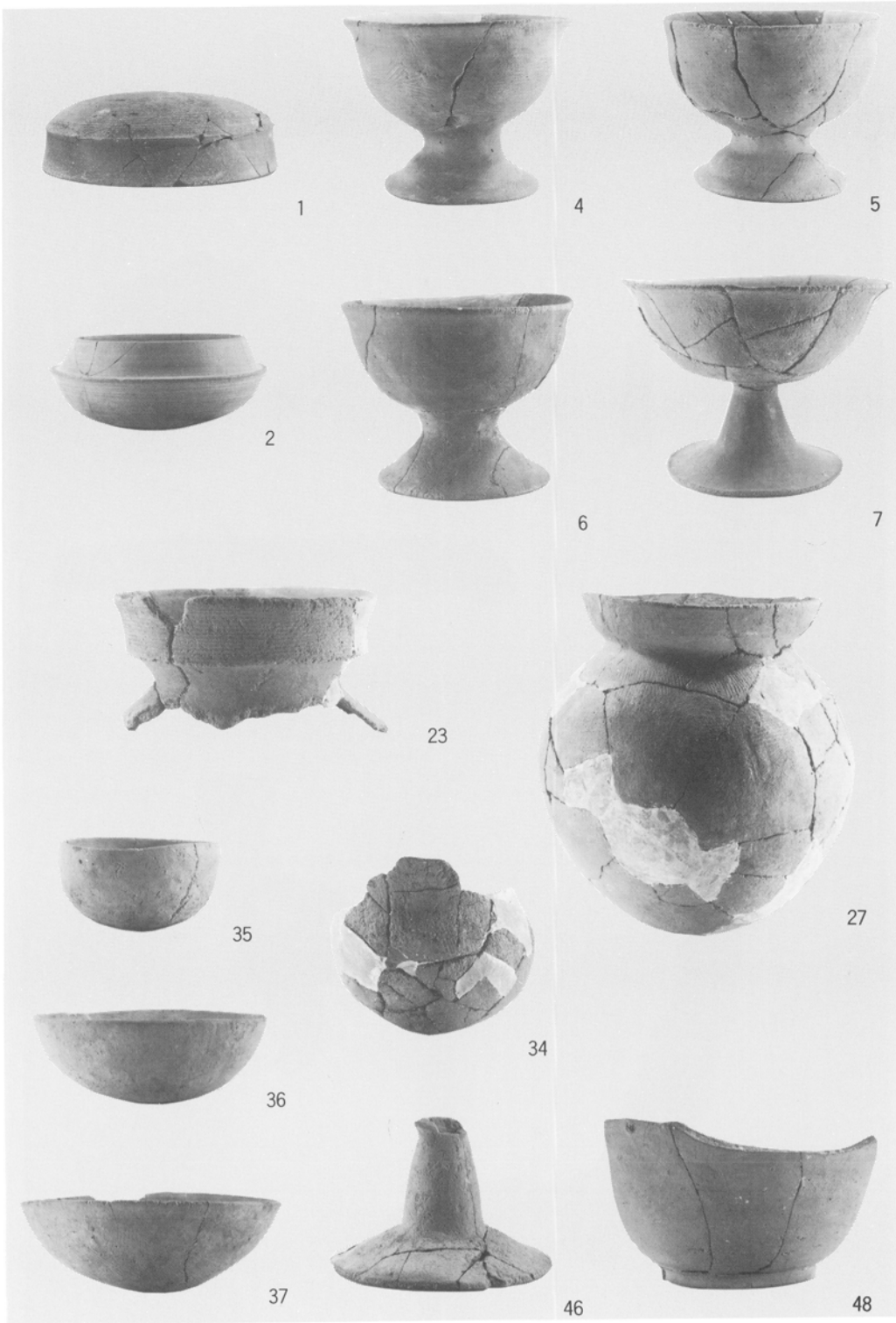
PL. 10

◀ST—02周溝内遺物出土状況

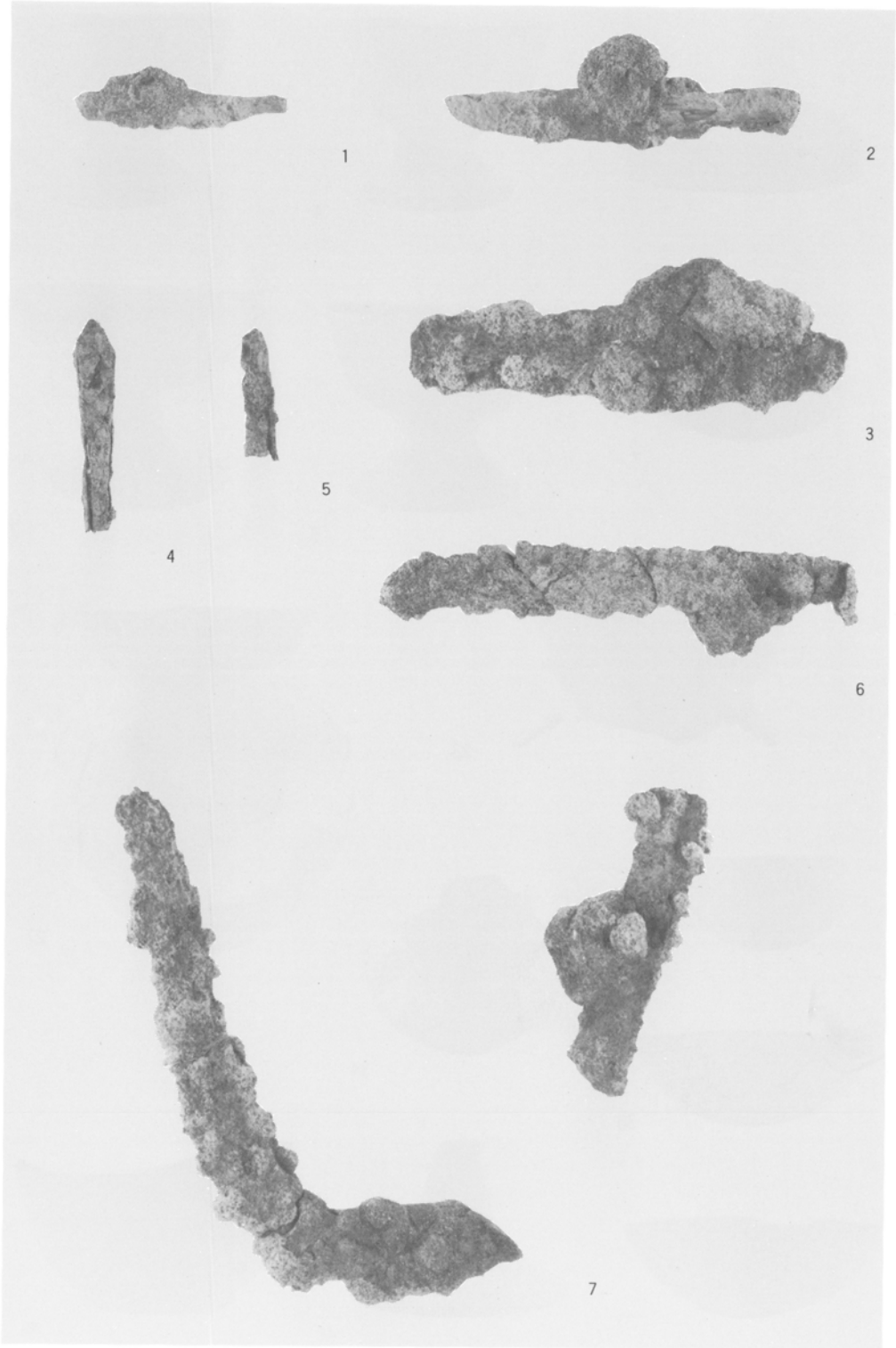


▶ST—02鉄鎌出土状況

◀火葬墓全景



ST－01・02出土遺物



ST－02出土鉄器

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第161集
唐原遺跡 －墳墓編－
1987年３月31日
発行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区大名2丁目10の29
印刷　博 巧 印 刷 株 式 会 社